幼児の教育　第115巻　第4号　平成28年9月1日発行　ISSN0289-0836

子ども学の源流を次世代につなぐ

幼児の教育

[特集] 保育現場で気になるコトバ考
「探求」とは……？

[リポート] こども園をつくる
文京区立お茶の水女子大学こども園の記録
vol.2 開園から三か月　始まりの日々

[実践研究] 私の保育ノート
ただ黙ってそばにいる幸せ

第115巻　第4号　日本幼稚園協会

秋 2016
since 1901

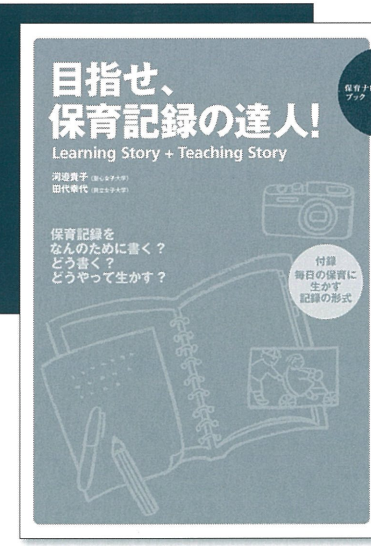
最新刊

保育ナビブックⅩ 第3弾！

※保育ナビ（月刊保育誌）から生まれた新シリーズ。
保育現場で気になるテーマをしっかり掘り下げます。

目指せ、保育記録の達人！

Learning Story＋Teaching Story

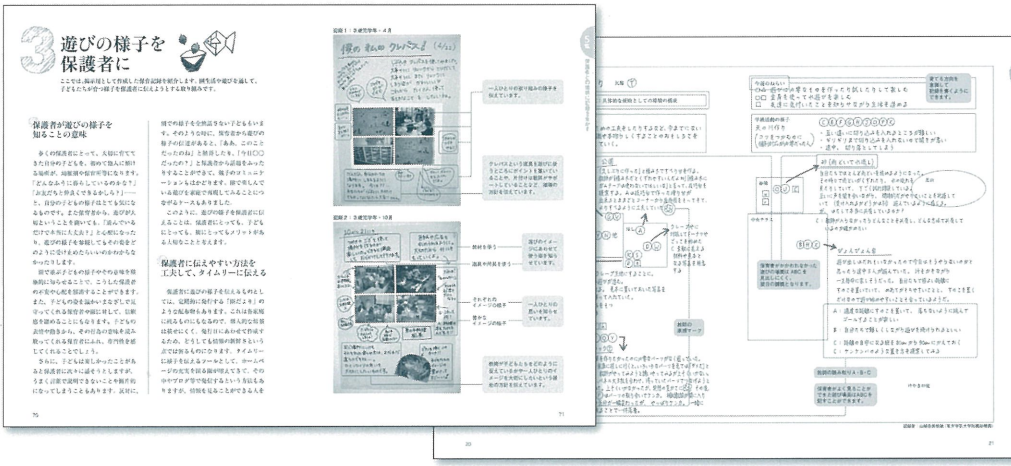


保育記録は、子ども理解を深め、同僚や保護者と子どもについて語り合うためのツールです。保育者の専門性を高め、質の高い保育実践を行うための記録の書き方を提案します。

共著：河邉貴子（聖心女子大学）　田代幸代（共立女子大学）

全 80 ページ　26×18cm
定価　本体 1,800 円＋税
109-54　ISBN978-4-577-81405-5

シーンに適した様々な保育記録の書き方と活用の仕方がわかる！



※画像は見本です。変更になる場合があります。

CONTENTS

●第１章　保育者の専門性と保育記録
●第２章　様々な様式の保育記録
●第３章　保育実践に記録を生かす
●第４章　園内研修に記録を生かす
●第５章　保護者との連携に記録を生かす

キンダーブックの フレーベル館
くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所
または本社保育営業部（03）5395-6608にお問い合わせください。

さつまいもやさんの
準備中

子どもの情景

子ども学の源流を次世代につなぐ
幼児の教育 秋2016
第115巻　第4号

写真
子どもの情景 1

目次 まど
探求のもと 2

特集
保育現場で気になるコトバ考 11
「探求」とは……? 4
《view 視野》
探求心　加用文男 5
《視点》
ライオンに〝なる〟ことを楽しむYの探求　木下育子 9
主体的な遊びの中でこそ育まれる「探求」を考える　北野幸子 13
探求と「ひたすら遊ぶ」は同じこと　菅本晶夫 17
《特集 memo》 21

実践研究
私の保育ノート
ただ黙ってそばにいる幸せ　江頭理恵 22
「心のままに楽しむ保育」への心の変化　肥後雅代 26
おばあちゃんの孫育て日誌
不思議が〝楽しい〟日々　瀧田節子 30

保育エッセイ
四季の子ども ③
月と木の実の謳　川田 学 34

本棚
古典の散歩道
『指輪物語』―創造世界の魅力―　荻原万紀子 38

目次

表紙の図柄は、お茶の水女子大学附属幼稚園内にあるステンドグラスの模様をデザイン化したものです。

リポート

こども園をつくる
— 文京区立お茶の水女子大学こども園の記録 — Vol.2
開園から三か月　始まりの日々　宮里暁美　44

子ども学探訪

幼児の教育アーカイブズとの対話 ⑥
「アメリカ教育使節団報告書」を通して見る
戦後幼児教育への希望（前編）　織田望美　50

そこにいる子が子どもであるということ ③
自分の中の「子ども」を手探りする　浜口順子　54

論考

保育の環境が纏う「時の経過」　松島のり子　58

子ども学のひろば

イベント・メディア情報・
読者投稿・編集後記　他　63

まど　探求のもと

今回のテーマは「探求」。この言葉で思い出す一つの情景がある。岩浜に、孫らしき三、四歳の男の子と釣りざおを垂れるおじいさんの姿。孫はしゃがんで、足元の小さいカニをつまみ上げた。じっと見つめて、おもむろにその脚を一本、二本と抜いた。おじいさんはそれを見て、大笑いした。

近くにいた私は一瞬驚いたものの、ああこれでいいんだと思った。「かわいそう」だとか「痛いよ」だのいらないのである（そのカニが絶滅危惧種であれば話も違うけれど）。おじいさん自身にも、遠い昔そんなことをした記憶があったのだろうか。

子どものやること、思い付くことには、すでに大人になってしまった人間には及びもつかぬ、思いも寄らない広大で深淵な宇宙が宿っている——という「前提」。おそらくこの前提があれば、子どもの思い切った行動も、大人には不可侵の尊重すべき領域のものに見えてくるはずだ。小賢しく、借り物のような博愛主義を掲げる前に、カニと人間のドラマチックな遭遇を愛でて面白がる、そのための前提だ。大人だって一人ひとり、確実にそういう子どもだったはずなのに……。「大人になってしまった自分」を慈しむ人に見守られ、子どもは存分に探求の触手を伸ばすのだろう。（H）

特集

保育現場で気になるコトバ考11
「探求」とは……？

「子どもの探求心を育てる」――昨今の幼稚園や小学校教育で、ひときわ注目されるメッセージです。何かに興味や疑問を抱き、試行錯誤を繰り返し、没頭する姿が思い浮かびます。その表情は一心で真剣そのものでしょう。人が「探求する」とき、そこでは何が起こっているのでしょうか。保育現場の先生、心理学や教育学の研究者、そして原子物理学の先生にも考えていただきます。

view
視野

探求心

加用文男
（大学教員）

はじめに

われわれ保育や幼児教育の関係者は「アート」とか「探求心」とかの言葉にやたらに弱い傾向があるということを率直に認めるべきかと思います。大人の世界では、「アート」は芸術につながりそうですし、「探求心」は科学につながりそうに思えてくるからでしょう。もちろんそうなのでしょうが、「芸術」という言葉は、美に中心化されて、基盤にある身体性を忘れさせる危険性を持っていますし、「科学」は、理知的な面に特化されて、感情性を、ひいては行為性を軽視させがちになるように思えます。必ずそうなるという意味では決してありませんが、そうなる危険性をはらんでいるという意味です。「弱い」ということはそういうことです。

「アート」は、素材となる何かにかかわることです。絵の具、パステルクレヨン、泥、砂、粘土、土、水、木、葉っぱ、虫、抜け殻、その他……これらに触れてかかわれば、身体が対象に浸されて「汚れ」ます。つまり「身体が汚れることをいとわない感性」、これが基盤になっているはずです。子どもたちがどんな立派なものを作ったか（描いたか、演じたか）だけでなく、

加用文男（かようふみお）
京都教育大学教授（発達心理学）。最近の著書：『遊びの保育の必須アイテム』（ひとなる書房）、『子どもの「お馬鹿行動」研究序説』（かもがわ出版）。1951年生。

子どもたちがこの「汚れ」に対してどのくらい深い耐性を持ち得たかも重要な構成成分となるように思えます。

子どもという存在を「探求心」に結び付けて考えた場合に忘れてはならないのは、行為性（あるいは「動き」）かと思います。

子どもの探求心と行為性

学童保育所という場でのことですが、指導員のYさんの報告です。

十数年前の学童保育でのこと。季節は冬。使っていないエアコンから、なんと水が噴き出してきたのである。このあり得ない事態に、一体何が起こったのか、大慌ての私だった。エアコンにつながっている管をたどり、室外機を見に行く。

なんと、足洗い場の水道の蛇口に、エアコンの排水ホースがきっちりつながり、水が逆流していたのだった。なんてことをしてくれた！　水浸しになったあたりを片付けながら、エアコンの故障にならないかと心配する指導員をよそに、当の子どもは、ああ、こうなるんだと納得の表情だったのを覚えている。

別の指導員のSさんも、「子どもというのは、やってはいけないことだとわかっていながらも、これやったらどうなるねんやろ？　などと、くだらないことを思い、変に好奇心を持った結果、自分がケガをしたり、良くない方向になったりしてしまう、おバカな生き物なのだ」と指摘しています。同じく指導員のMさんの息子さんは、小学校一年生の時、カエルを冬眠させ

ようとして冷蔵庫に入れたという。

思い付いたことはやってみたくなるという子どもの傾向を示す調査・研究は幾つかありますが、わかりやすいものとして、超能力の信じやすさについての研究を挙げることができます。一九七〇年代から八〇年代にかけて、自称超能力者ユリ・ゲラーをテレビ番組が盛んに取り上げて、一つのブームをつくり上げました。子どもたちばかりではなく高校生や大学生、果ては一部の大人たちまで巻き込んで非科学性志向が強められた時代でした。その傾向は九〇年代以降も弱まってはいませんが、こういう傾向に関連させてベネッセコーポレーションが一九九四年に、小学校四、五、六年生約一六〇〇人を対象に「おばけとジンクス」という調査を行っています。大規模な調査ですし、調査項目も多岐にわたっていますが、例えば「スプーン曲げ」などについて面白い結果を示しているのです。実際に「念力で曲げようとしたことがありますか?」という問いに対して、約六割の子どもたちが「やったことがある」と答えているのです。大人でも、自分でもやってみたという人は少なからずいるでしょうが、小学生は六割の子たちがやってみたというのです。こういう結果を見て、やはり子どものほうが信じやすいのだ、マスコミの影響を受けやすいのだと受け取ることもできますが、やってみたくなって実際にやってみたという回答に子ども性を見ることもできるのではないでしょうか。マスコミ由来の情報をなんとなく受け入れてしまうことの多い大人性との対比で考えてみますと、子どもたちの能動的な「ふとノリ」行動傾向に未来を感じたくもなります。

次は、河崎道夫著『ごっこ遊び』（ひとなる書房　二〇一五年）で紹介されている、ある女

子学生の『魔女の宅急便』をめぐる述懐です。ごっこというより、探求的な「ふとノリ」行動のようです。

「私も昔はキキのまねをしてホウキにまたがっていたなと思い出した。小学校か中学校になって友だちに聞いてみると女の子はみんな、一度はやったことがあるといっていた。私の感覚だけかもしれないが、キキのまねは、セーラームーンのまねと少し違った心境であったように思う。セーラームーンに対しては憧れがありつつも、それが非現実的であることを理解していたが、キキには本当になれそうな気がして、ホウキをまたがずにはいられなかったのである」

思い付いたらやってみたくなって実際にやったという行為性こそが、子どもの世界の探求心の本質と理解すべきなのかもしれません。

最後に一つ紹介。日本児童教育振興財団主催「第51回わたしの保育記録」（二〇一五年）で大賞に輝いた山梨大学教育学部附属幼稚園の北上夏希さんの記録は、ある子が登園中に見つけたカエルを（逃げ出さないように、と思ったのか）頭と手だけ出して砂場に埋めておいたらいなくなった……ことから始まりました。その後、みんなを巻き込んで大騒動となり……（詳細は原文に）……子どもたちの行動力と、それがクラス中に伝染していく姿に、若い担任がたじたじとなりながらも付き合っていって、「カエルのお尻から赤いものが出てる！」という大事件ではついに養護の先生まで巻き込んで、カエルのお尻に綿棒を差し込んでチョウチョならぬ脱腸解消事件へ……。子どもたちの発言の羅列だけではとても描けない行為性記録となっており、読者を脱帽させます。

視点1

ライオンに〝なる〟ことを楽しむYの探求

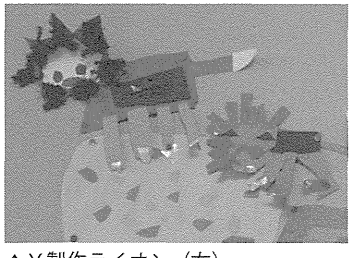
木下育子
（幼稚園教諭）

私が勤務する奈良県大和郡山市の保育には、一人ひとりの子どもの表現を大切にするという文化があります。Yと共に過ごした幼稚園でも、子どもが心を動かしたものに〝なる〟ことを楽しむ姿が見られました。

四月、Yは五歳児クラスに転入してきました。新しい環境への不安が強く、泣いて保護者と離れられない日が続きました。五月、子どもたちから広がったお化け屋敷作りで、お化けタクシーを作り、三歳児や四歳児をお化け屋敷まで誘導することを考え出したY。友達からも認められて、好きな遊びを楽しみ、生き生きと生活するようになりました。

遠足でライオンに出会い、ライオンが好きになるY

六月。Yは、動物園への遠足後、ライオンの絵を絵の具で楽しそうに描きました。ライオンのタテガミを毛糸で工夫して製作したYは、ライオンが寝転ぶ大きな岩も作り、ライオンが暮らす世界を表現していきました。



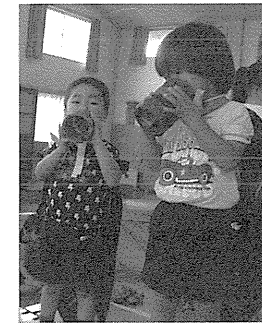
▲Y製作ライオン（左）

木下育子（きのしたいくこ）
大和郡山市立郡山北幼稚園勤務。子どもの遊びの楽しさや発想の面白さに魅了されています。

筒との出会いで、迫力あるライオンの声に気付くY

Yは、筒を口に当て、声を出すと、迫力のあるライオンの声になることに気付きました。「ウオー　ウオー」と筒を口に当て、目を輝かせるY。Yと共に私も筒を口に当てて声を出すと、迫力満点のライオンになることができ、気分爽快でした。Yの筒は園内中に広がり、みんなが筒を口に当てて、ライオンになることを始めました。次第に、長い筒や短い筒を口に当てて声の違いを試したり、筒を使ったときと使わなかったときとで声の出方の違いを比べたりして、ライオンの吠え方を探求していきました。

Yはお気に入りの筒に布テープを貼り、自分専用の筒を作りました。Yのライオンになる遊びは、この筒という〝モノ〟との出会いから生まれました。Yにとって筒は、自分でない、ライオンになるための必須アイテムであったと思われます。筒があることで、憧れの強いライオンになれたY。筒は、ライオンになるYが周りの友達と遊びを楽しむために使われ、筒を通して遊びが深まっていきました。



▲こっそりYの筒を使う3歳児

ライオンになるYの探求

Yは、ライオンが座ったり寝転んだりできる大きな岩を、段ボールに布テープを貼って数日間かけて丁寧に作りました。何度も上に乗っては安定感を確かめ、頑丈な岩を作ると、檻で場を囲みました。岩の上に乗り、ライオンになるY。岩のそばには自分専用の筒を置き、ライオンを見に来た三歳児や四歳児に、鋭い目つきで真剣に吠えます。怖がる友達の姿から、強いライオンになることができてい

る自分を感じたYは、次第に、筒を使わずに自分の生声で吠え、見に来た友達を威嚇するようになりました。筒に頼らずに、自信を持ってライオンになるY。四歳児の中には、Yのライオンに憧れて「入れて」と言う子もいました。Yは「いいよ」と優しく応え、一緒にライオンになることを楽しみました。その後、Yのライオンになる遊びは、幼稚園内に広がり、それぞれの子どもが自分のライオンになる探求を楽しみました。

生活発表会の劇『エルマーのぼうけん』でライオンになるY

二月の生活発表会で、大好きな物語『エルマーのぼうけん』の劇をすると決めた子どもたち。Yは、やはり物語に登場するライオンが好きで、ライオンになることを楽しんでいました。劇の役割を決めるとき、クラスの子どもたちは「Y君、ライオンになることをずっとしてきたから」と、Yにライオンの役を勧めました。Yは考えた末、「やってみたい。ライオンになる」と応え、ライオンの役を引き受けました。クラスでは友達の前に進んで出ることは少ないYですが、挑戦したい気持ちが生まれ、役を引き受けたものと思われました。劇遊びを楽しんでいく中で、Yのなるライオンは、日増しに迫力を増していきました。「Y君のライオン、大きな声で吠えて、すごいな」という友達の声に、自信を持つY。生活発表会当日には、物語『エルマーのぼうけん』のライオンの特徴を捉えて〝なる〟ことを楽しむYの生き生きとした姿が

▲作ったタテガミを持ってライオンになるY

ありました。ライオンを探求してきたことが活かされたのです。

修了式でみんなに伝えたいことを考えるY

幼稚園では、園長先生から修了証書をもらうときに、幼稚園で楽しかったことや、伝えたいことを考えて、修了式で語ることになっています。練習でYは「ライオンになったこと。ライオンになって吠えていたら、強くなった」と、胸を張り、答えました。このとき私は、堂々と語るYの言葉に感動して、胸が熱くなりました。「Y君が強く大きくなったのね。うれしいね」と伝えると、Yは満足そうでした。修了式の当日には、「ライオンになって吠えていたら、僕も強くなりました」と大きな声で話し、園長先生から堂々と修了証書をもらうYの姿が見られました。

ライオンになるYの姿から探求を考える

自分でない、ライオンになることで、Yは、見えないものが見えたり、できないことができたりし、無限の未知の世界を探訪していきました。ライオンになるYを見つめる友達からの言葉や認めは、Y自身が、自分の良さや、自分と友達との違いに気付くことにつながりました。本来の自分と、ライオンになる自分とを行きつ戻りつする中で、憧れの自分（強い自分など）や、自分の中にある潜在的なもの（泣いてしまう自分など）に気付き、自分を客観的に見つめ、自分と向き合っていったのではないかと思われます。Yは、自分の中にある新しい自分を発見し、自らを成長させていきました。

〝なる〟ことを楽しむ中での子どもの探求は、自分探しの旅なのではと思われます。一人ひとりの子どもが心を動かしながら〝なる〟プロセスに丁寧に向き合い、子どもと共に探求し続ける喜びを感じていきたいと思います。

視点2

主体的な遊びの中でこそ育まれる「探求」を考える

北野幸子
（大学教員）

「探求」という言葉から感じたこと

「探求」という言葉についての執筆依頼を頂いたとき、まず思い浮かんだのは、デューイ（一八五九・一九五二）の『論理学―探究の理論』（一九三八年）でした。私は、拙いながら卒業論文でデューイの幼児教育論について検討しました。神戸大学は百十五年近くの幼稚園教員養成の歴史があります。大学の書庫には南イリノイ大学発行のデューイの全集があり、卒論執筆のために索引から kindergarten という語のある論文を探し、むさぼるように読んだことが懐かしく思い出されます。

かつての主事（現在の園校長にあたる）であった及川平治（一八七五・一九三九）がデューイの友人だったこともあり、神戸大学附属幼稚園では、子どもの遊びと生活を通じた経験主義的な教育実践を指向してきました。日本の大正新教育運動の担い手でもあった及川平治は、子ども中心の教育を提唱し、常に子どもの事実を起点とし、子どもの興味関心に応じ子ども自身が主体的に「探求」を深めることができるような動的（アクティブ）な教育活動を提唱しました。神戸大学附属幼稚園では現在でも、子どもの事実の記録を基に毎年教育課程や保育計画を見直すという形での

北野幸子（きたのさちこ）
神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授。乳幼児教育学、保育学、保育領域の専門職化、保育者の専門性について探求しています。

カリキュラム・マネジメントを続けています。

デューイのいう「探求」とは

デューイは、人は実際に体験しながら学ぶと考えました。彼の“Learning by Doing”（為しながら学ぶ）という言葉は有名です。彼は、人の知的働きにおいて「探求（inquiry）」が大切であるとしました。人やモノとのかかわり、つまり体験と、人の認識活動や知的探求とは、分離したものではないと考えました。

デューイは特にそれまでの、主観と客観、事実と価値、理論と実践といったことを二項対立的に捉えることに疑問を抱いていました。まさに体験しながら学び、探求しながら、不確かであったモノについて確信していく、よって、学びとは知的探求が実践と一体化しているものだと考えていました（Dewey, 1938）。よくプラグマティズム[注]とは「探求の理論」ともいわれますが、彼は、「探求」が深まると、単なる体験にとどまらず、思考することにより、概念化や一般化をもたらすことができると考えたのです。デューイは動的（アクティブ）な学びの方法を常に模索していたと言えます。動的な学びとは、興味関心が起点となり、問いが生まれ、それを体験的に解決していく、問題解決型の学びです。そこでは、何のために、何を学ぶのかにとどまらず、どのようにして学ぶのか、が大切にされます。学びの過程において教育者は、子どもとの相互作用を重視した丁寧な援助を行います。

学生時代、今思えば拙く不毛な二項対立的発想ですが、私は、設定保育vs好きな遊びを中心とした保育（自由保育）、子どもの主体性の尊重（応答的）vs保育者の教育的意図（教育的）といった構図で保育の在り方がいかにあるべきかを悩んでいました。デューイの「探求」の概念やその教育実践の影響を大いに受けた及川平治は、『分団式動的教育法』（一九一二年）等において、理論と実践や、応答的でありかつ教育的であるという折衷的な考え

方を提示し、実践において科学的であることを目指し模索していました。「探求」をキーワードに、これらデューイや及川平治の幼児教育論と出会ったことは、私にとって、幼児教育における応答的でありかつ教育的である方法を学ぶきっかけになりました。

プロジェクト法（プロジェクト・メソッド）とは、「探求」を動的（アクティブ）に行う、体験的な問題解決型の教育実践の方法です。体験を通じて、学びの理論化や一般化がもたらされます。昨今、日本や各国でプロジェクト型保育が広がっています。ここでは主体的な遊びと生活、環境を通じた教育が大切にされています。子どもは、没頭して遊び、「探求」しながら、世界と自分、他者と自分の関係性をつくっていきます。乳幼児教育においては特に大切にしたいことであると思います。

プロジェクト型保育と「探求」

『プロジェクト・メソッド』（一九一八年）を著したキルパトリック（一八七一・一九六五）はデューイの弟子で、両者から影響を受けて幼児教育の分野でプロジェクト型保育を提唱したのが、イリノイ大学名誉教授のカッツです。プロジェクト型保育はイタリアのレッジョ・エミリア等、各国で発展していきました。

プロジェクト型保育とは、あるトピックスについて「探求」を深め、体験的に学ぶ保育であり、まさに子どもが没頭して遊びながら学び育つ姿と重なるものであると考えます。

プロジェクト型保育の起点は、子どもの好奇心・探求心・憧れ等の気持ちと、それにいざなわれ子どもが行っている活動（遊びや生活）の事実です。子どものアイデアを大切に子どもたちとしっかりと議論しながら活動が展開され、子どもたちの相互作用の下、保育の計画が協同的につくられていきます。

プロジェクト型保育においては、子どもが没頭して遊ぶ中で、体験的に調べたり試したりしながら「探求」を深め、学んでいきます。

その中で考えや学びを可視化、表現し、「探求」した個々の学びの内容を確認し、相互作用の下、子どもたちの間で共有していきます。プロジェクト型保育で子どもが何に興味関心を持ち、いかに遊び込み、「探求」を深めていったのかを保護者に可視化する手法として、レッジョ・エミリアでは「ドキュメンテーション」が作成されています。遊びの中の子どもの育ちや学びの過程を可視化した記録である「ドキュメンテーション」は、保護者に伝えるのみならず、それによって子どもたちが省察したり、保育者間で保育を共有したりするといった機能も果たしています。

子どもの「探求」と保育者の専門性

保育現場で大切なことは、今まさに目の前にいる子どもたちが、人やモノとかかわることを楽しみ、今の発達に適した経験が得られて、生きる力を育んでいることです。

子どもたちの好奇心・探求心・憧れを起点とし、相互作用を大切にしながら「探求」を深めていく教育には、ライブで展開する遊びの場面で、保育者が判断し、働き掛けるその援助が大きな役割を果たします。あらかじめ「めあて」を設定し、自覚的に同じ内容を同じ方法で同じ教材（教科書等）を活用して手順通りに学ぶ小学校以降の教育とは異なり、保育者の専門性は、まさに相互作用の下、子どもと共に「探求」を深める教育の援助であると言えます。

子どもの「気持ち」を洞察すること、遊びの中の育ちや学びを見取ること、そして、高い関心と過度ではない期待を持ち、子どもと子どもをつなぐこと、育ちの見通しを持って環境構成や教材を準備し、「探求」を深めていくこと。こういったことを可能とする保育者の専門性こそが、保育の質の鍵を握っていると考えます。

注　十九・二十世紀転換期に米国で発展した、思考は行為や事実と結び付くべきとする考え方。

視点3

探求と「ひたすら遊ぶ」は同じこと

菅本晶夫
（大学教員）

広辞苑を開くと、「探求」とは「ある物事をあくまでさがし求めようとすること。」とあり、真面目な取り組みとの印象を受ける。一方、「遊び」とは、①遊戯②猟や音楽のなぐさみ③遊興　特に、酒色や賭博をいう④あそびめ⑤仕事や勉強の合い間⑥人生から遊離した美の世界を求めること⑦気持のゆとり⑧［機械工学］例「ハンドルの遊び」―などとあり、「暇なときに楽しむものであり、気持ちにゆとりがあることも逆にのめり込むこともある余技」といった印象を受ける。

広辞苑の記述は一般成人向けのものだが、子どもたちや科学者の「遊び」とは少し違う。私は自然科学者であるので、子どもたちと同じように日々「ひたすら遊ぶこと」に徹している。なぜなら「ひたすら遊ぶこと」が自然の真理を探求する一番の早道だからである。

自然科学者の私は、自然の根本原理を知りたいと考えて、それを探し求めようとするが、そもそも物事の本質あるいは根本原理はどのようにして明らかになるものなのだろうか。もちろん、探し求めたい対象があれば、それについてこれまで知られている事実をできる限り数多く理解しておく必要はある。そのためには忍耐と努力が必要であるが、いくら事

菅本晶夫（すがもとあきお）
お茶の水女子大学名誉教授。放送大学客員教授。専門：素粒子論。著書：『対称性の自発的破れ』（共著、サイエンス社）。
趣味：酒、バイオリン、附属小保護者とコーラス、書道、落語等。

実を数多く学んだとしても、いくら涙ぐましい努力を重ねたとしても、新しい原理の発見に至ることはまれではないだろうか。

発見というものは、誠実な心をもって真摯に、あらゆる苦労に耐えながら、あらゆる努力を積み重ねれば得られるのだろうか。私は若い頃そう思っていた。しかしいくら努力しても、もちろん努力が足りなかったのだろうが、何も新しい発見は得られなかった。それで自分の人間性と考え方に問題があると考えて、「悟り」とは何かを探求し始めた。二十代半ばのことである。しかしながらどんな書物を読んでも「悟りとは何か」の具体的なことは一切書かれていなかった。人生の根本課題であるにもかかわらず、なぜ書かれていないのか不思議でならなかった。日本語の所為だと考えて、鈴木大拙の英文 Zen Buddhism のページをめくってみた。正確には覚えていないがそこに、昔の人の話として、「普通の日常生活が悟りである」と書かれていた。一瞬「あれっ」と思ったが理解できず、そのまま放置した。すでに三十歳を過ぎていた。

ところが三十代の終わりになって、眼の治療で入院することになった。そのとき、紀野一義の講演を録音したCDを義兄が差し入れてくれた。道元の「正法眼蔵」に関する講演であった。とても興味を持った。退院後、「正法眼蔵」の最初の巻「現成公案」を通勤の行き帰りに毎日読み続けた。「悟り」とはすでに存在する。それは宇宙の根本原理であって、あらゆる所に存在する。「その存在に気付く」ことが「悟り」である。しかし「自分から動いて真理を求めようとするのは迷いであり、真理のほうから動いて自分の中に飛び込んで来るのが悟りである」と美しい日本語で書かれていた。この巻の最後に、「風を手に入れたければ扇であおぐ必要がある」とも書かれていた。自分がわかることは限られている。従って、己を知りたければ己を忘れよという。

ようやく「悟りとは何か」がおぼろげながらにわかったが、そのときすでに四十歳になっていた。その後は一切悩むことなく、この考えに従って生きてきた。五十代の終わりから三年間、大学の附属小学校長を務められたのだから、恐らくこの考えはそれほど間違っていないのではないだろうか。

これを探求に当てはめてみよう。探し求めたい対象は何であってもよいが、たとえそれが「自然の根本原理」であるとしても、その対象はすでに存在している。それを発見して自分のものにしたいのだが、自分から動いて求めてはいけない。真理の側が動いて自分の体に飛び込んで来るのを、己を忘れてひたすら待つのである。もちろん、真理を呼び寄せる小さな働き掛けくらい（扇を使うくらい、これまで知られていることを少し理解するくらい）はしなければならない。

この「成果を積極的に求めず、己を忘れてひたすら真理が自分の体に飛び込むのを待つ」心理状態は、子どもたちが「遊びに夢中になる」ときの心理状態と同じである。何か面白いことがありそうだというので、ひたすら楽しそうに遊ぶ。もちろん成果など期待しないが、時々新しい発見が体に飛び込んで来る。この小さな成功体験の感触が得られれば、面白くてたまらなくなって、遊びに病みつきになる。その意味で遊びには③賭博性がある。

研究も同じである。毎日毎日、楽しくお絵描き（すなわち研究）を続ける。絵を描くといっても数式を書いているかもしれないし、どんな絵を描くかは自由であり、人それぞれに異なるだろう。ただひたすら、成果を求めず、真理を発見したいという当初の目標も忘れ、己も忘れてひたすら楽しく遊び続ける。これを毎日毎日続けていると、真理を受け入れられる体に体質改善する。そうしたらしめたものである。真理を受容できる体には、やがて真理が自ら到来するのである。このとき、

楽しく遊ぶことが重要である。楽しさを感じると心に余裕ができて柔軟に真理を受け入れることができる。なぜ上記のようになるのかというと、悟りも探求も遊びも、人知を超えた営みだからである。

老母に孔子は「吾れ十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲する所に従って、矩を踰えず」と言って七十代半ばで亡くなったが、八十、九十はどんな心境かと問うたところ「ひたすら遊ぶ。八十は現世と遊び、九十は来世と遊ぶ」と答えた。十五以下は聞かなかったが、もちろん「ひたすら遊ぶ」であろう。遊びの中からすべてが現れる。真理もそうだし、思いやりの心も、自然と人間に対する感動も現れる。すべては遊びにあり、その中から人はさまざまなことを学んで成長する。従って、人の一生において一番重要なことは「ひたすら遊ぶ」ことである。この営みを子どもや老人だけにさせておくのはもったいない。大人こそ率先して大いに遊ばなければならない。「成果が得られない」という人がいれば、「ひたすらわれを忘れて遊んでいないからだ」と答えたい。遊びとは、自然と人間の活動を探求することであり、極めて高度な人間の営みである。

最後に、探求や遊ぶ際の人とのかかわり方について補足する。人とのコミュニケーションはとても重要であり、さまざまな人が関与すると、探求や遊びに幅ができる。しかしながら、探求や遊びを深めるには、独り静かに振り返る時間を持つべきである。すなわち「アトリエ」と「サロン」を行き来する必要がある。「アトリエ」にこもって自分と向き合う静かな時間と、「サロン」で大勢の人と楽しく意見を交わす時間とを交互に持ちたいと思う。そうすると、より真理を受容しやすい体質になるだろう。

特集
memo

この秋号は「探求」がテーマである。生まれて間もない赤ん坊は寄る辺なさの中で手足を動かし温もりを求め、その中に身を埋める。やがて身の周りの世界に向かって手を伸ばし、口に含んだりたたいたりする。六か月頃には、自分自身の足の指をくわえたり手にじっと見入ったりする自己刺激的運動も盛んになり、「これは何?」「どんなもの?」「なんでそうなるの?」と、世界と自己の関係を探る。What?とHow?とWhy?の不可分の世界。「求」を「究」とする「探究」の語もあるが、幼い子どもの姿を観察すると、身体的可視的な「求め」と精神活動としての「究め」が未分化に始まっていることがわかる。

子どもが何かに向かって探求する行為は、大人のそれに比べて動きを伴うことが特徴で（加用氏）、結果的に汚れたり散らかったり壊したりが普通。道理で子どもの探求的行動は大人に抑止されやすくなる。「探求」を直接的にじかに知的発達へと結び付けたい昨今の大人はそこに軋轢を感じ、コンパクトで片付けやすい、汚れない、失敗が少ない調理セットや実験おもちゃのような商品を求めがちだ。北野氏は、大人の都合ではなく子ども側のペースでの探求を保障しようとする教育方法の系譜について論じてくださった。自然科学者の菅本氏は、探求したいものは向こうから迫ってくると言う。日常生活の中で十分遊ぶことが探求対象を見いだしやすい体をつくる、というふうにも読めた。遠足でライオンを見た子どもが「ライオンになる」子どもの話（木下氏）。それを面白がって援助する保育者のいる環境が、探求心の苗床になっているようだ。（浜口）

ただ黙ってそばにいる幸せ

江頭理恵
（幼稚園教諭）

小学校から幼稚園に転任してきて、三年目になります。小学校に長年勤めてきましたが、三年たってもまだ、毎日さまざまな思いと葛藤しながら幼児教育を学ぶ日々です。

三年前、私は年少児を担任することになりました。

本園では、登園してきた子どもたちは自由に遊び始めます。クラスで一緒に動くのは、基本的に帰りの時間だけです。これまで毎日、時間割を基に過ごしてきた私は、次の日の見通しがまったく立たず、不安になってしまいました。

最初の日、「もも組さーん、お帰りの時間ですよ!!」と大きな声で呼ぶと、副園長に「呼んでも誰も来ないと思うんだけど……」と言われました。そういえば、みんなそれぞれに夢中になって遊んでいますし、他の先生方を見ると、大きな声で呼んだりされていません。「帰りの時間には集まるのが当たり前」と勝手に思っていた自分が恥ずかしくなりました。「どうすればいいのでしょう?」と尋ねると、「一人一人声を掛けていくの。それと、お部屋で何か楽しいことがあるって思うと、集ま

江頭理恵（えがしらりえ）
佐賀大学教育学部附属幼稚園教諭。平成26年度に公立小学校より交流人事で異動。幼稚園教諭としてはまだ3年目です。

ってきますよ！」と言われました。その日、何にも用意していなかった私は、深く反省しながら、「お部屋に入ろうね」と声を掛けて回りましたが、どうしても入ってきません。何とか副担任の力を借りて子どもたちを保育室に集めましたが、かなりの時間がかかり、予定していた絵本を読む時間もなくなってしまいました。

その日から、とにかく保育室に集まると楽しいことがあると思ってもらうために、先生たちに教えてもらいながら、手遊びを覚えたり、ペープサートを準備したりしました。自分に子どもたちを引きつける何の技量もないことが情けなく、落ち込む日々でした。

それでも一週間ぐらいたつと、しっかり遊んで満足した子どもたちは、「今日は何の紙芝居があるの？」と、むしろ帰りの時間にみんなで何かすることを楽しみにして保育室に戻ってくるようになりました。まだ生まれて三年余りしかたっていない子どもたちの自ら育つ力に、圧倒される思いでした。

ですが、保育室に集まってくるようにはなったものの、どうもスムーズにいきません。

そのとき、「次から次に進めないと。間に時間が空くから、その間に子どもたちはバラバラになってしまうのよ」と、また副園長に助言をもらいました。小学校は一斉で動くことが多いので、全員がそろうまで待つことが多いのです。待つことが大切だと、学んでもきました。無意識のうちに、子どもたちがそろうのを待っていて、その間に子どもたちの意識は途切れてしまっていたのです。

二年目には、そのまま子どもたちを持ち上がり、年中クラスを担任しました。年中になると、集団で遊ぶことも増えてきます。

ある日のこと、年長児に教えてもらって、「氷鬼」が始まりました。氷鬼といっても、タッチされても氷にならない子もいたり、鬼もたくさんいたり、緩いルールで始まりました。

そのうち、氷になった友達を助けるところがスリルがあって面白いと気付いた子が「凍らないと、助けられないから面白くない！」と言いだし、「ずっと走ってたら疲れるから、バリアを張って、鬼が入れない場所をつくろう」とか「鬼も休む場所がいるよ」と、自分たちで話し合ってルールをつくりだしたのです。クラスで微妙にルールが違うので、年長児と氷鬼をする時は、「どっちのルールでする？」という話し合いから始まります。四、五歳の子どもたちが、こんな話し合いをすること自体、私にとっては衝撃でした。また、鬼ごっこは、まずジャンケンをして、鬼を決めて……と決めつけて、子どもたちの創造性を摘んでいた自分に気付くことができました。

このように、幼稚園に赴任して今日まで、新たな発見の連続で、それは、これまでの長い教員生活を反省する日々でもありました。

本園の先生は、誰一人大きな声を出すでもなく、声を荒げるでもなく、子どもたちの思いに寄り添っています。保育者と子どもたちはある意味対等で、保育者が裁判官になることもありません。日々の保育の中で、子どもたちのつぶやきに耳を澄ませ、言葉にならない思いをくみ取り、自らの思いを返していく姿に、学ぶことが多いです。

もちろん、「教科」というものがあり、それぞれの目標がある小学校で、すべて同じようにはできないでしょう。しかし、私自身を振り返ってみると、大人の願いにはめ込む形で子どもたちの行為を評価的に見る「教育の働き」[注]が過剰になっていたように思います。

子どもたちが見えない壁にぶつかっているときに、今までの私だったら、まず自分に何ができるかを考え、あれこれ尋ねたことでしょう。もちろん、今でも必要なときは「どうしたの？」と尋ねることはありますが、ただ黙ってそばにいるだけで、子どもたちは自ら考え、葛藤し、ふと顔を上げ、強い瞳を私に向け、「遊んでくるね」と駆けていくことがほとんどです。子どもたちには、自分で考え、乗り越えていく力があることを、改めて感じさせられる一瞬です。

小学校に勤めていたときは、黙ってそばにいたくても、その時間がありませんでした。授業の時間が迫ってくると、私自身が葛藤した末に、「後でお話聞くからね」と謝ることも多かったのです。放課後、「あのときはどうしたの？」と尋ねても、「もういい!!」と心が離れていってしまっていることもよくあり、申し訳ない気持ちでいっぱいになっていました。

でも、今は、ゆったりとした流れの中で保育をしているので、その時間が十分に保障されています。

時には、二人でブランコに揺られながら、時には手をつないで、ただただ黙って歩きながら……。

そんなことができる幸せ。そんな時間が保障されている幸せを今、感じています。それができる幸せを今、感じています。それができる幼稚園は、なんて素敵なところなのでしょう。

注 鯨岡峻『子どもの心の育ちをエピソードで描く』ミネルヴァ書房　二〇一三年

「心のままに楽しむ保育」への心の変化

肥後雅代
（保育士）

最近、「肥後さん、楽しそうだね」とか「保育を楽しんでいるね」と、他の保育士から言われることが増えました。実際に私自身、毎日の保育がとても楽しいのです。

私はこれまで九年間、常勤保育士として働いていました。その後、今の職場で非常勤に変わり、現在二年目になります。常勤として保育をしていたとき、タイトルのように「心のままに楽しむ」ことが難しいと感じていました。常勤であるという気負いからか、どうしても先の活動のことを考えてしまったり、一人の子の遊びが長引くと、その子に付き合いながらも他の子のことが気になって気持ちがそわそわしてしまったり、ということがたびたびでした。しかし、この一年では、先々の活動のための今ではなく、この瞬間瞬間を大切にしよう、大切にしていいのだ、という気持ちに変わっていきました。

見方が大きく変わったことの一つが製作活動です。以前は、雨天で外に出られない日に展開する活動というイメージが私の中では強かったのですが、晴れている日も、戸外遊びの前後に積極的に製作活動を行うようになりました。製作や描画のような表現活動が戸外

肥後雅代（ひごまさよ）
認可保育園で6年、お茶の水女子大学附属いずみナーサリーで3年、常勤保育士として勤務。現在は、同ナーサリー非常勤保育士。

の活動とどんなふうにつながり、何をどのように表現するかを楽しみにするような、おおらかで柔軟性のある見通しを持つこともできるようになった気がします。

春はタンポポ摘み、夏は水遊び、秋は落ち葉遊び、冬は雪遊びなど、楽しさが積み重なったときの製作活動では、目を輝かせて夢中になっている子どもたちの姿がありました。気持ち良さそうに腕をいっぱい伸ばして描いている姿や黙々と粘土をこねる姿を見ていると、子どもたちの心の中がのぞき見えるようなうれしさを感じることがしばしばあります。

製作活動では形にすることをつい目指してしまいがちですが、最終的な形よりも、その工程でどれだけ子どもの心が動き、表現できたかが大事なのだと改めて感じました。

全身で丸ごと受けとめる

非常勤一年目の二〇一五年度は、常勤保育士のNさん、非常勤のSさんと私の三人で、一、二歳児クラスを受け持つことになりました。前年度は常勤保育士として〇歳児クラスの担任だったので、一歳児になった同じ子たちを持ち上がりで見ることになったということです。持ち上がりとはいえ、非常勤としてのかかわりは初めてのことなので、保育計画を読み、子どもの顔を思い浮かべながら考えるものの、どのように担任をサポートしたらよいのか、迷うところもありました。しかし、

全身で気持ちを表現したり、全力で遊ぶ子どもたちの姿を見ているうちに、「ああ、そういうことか」と気付きました。

同じクラスを受け持っているSさんは、柔らかな草原で、力有り余る三歳の男児とお相撲を取っていました。彼女のその姿を見て、保育について頭の中で考えるより、とにかく全身で受けとめようと思いました。それからは、初めてお相撲も取ってみたり、子どもたちと全力で走って草原にゴローンと寝転がってみたり。今までの私なら〝いいのかな?〟と思うことも、大胆に、子どもと大笑いしながらやってみました。体の小さい私は、三歳の男の子が不意にドーンと背中に飛びついてくると、よろめくことが多々ありました。それでも、「体も気持ちもドーンとぶつけてきてね」という気持ちでいました。心の底から笑い合ったり、モヤモヤした気持ちを吹き飛ばすように全速力で風のように走り回ったり、一休みしたいときに草原に寝転んでぼーっとしたり。学生の頃から「子どもに寄り添うことの大切さ」を教科書で習ってきましたが、このような時間を共に過ごすことの積み重ねが「子どもに寄り添う」ことなのかなと、初めて心の底から思えました。

働き方を変えて

先に述べた通り、私は、現在の職場に勤務した当初は、常勤保育士でした。職場の特徴である「日数選択型」(週のうちの登園する曜日と回数を選べる)の保育では、日々の登園するメンバーや人数が異なります。そのため、どのようにしたら子どもたちが同じように経験を積み重ねて、仲が深まり、遊びが広がっていくだろうかと模索し、悩む日々でした。

また、家に帰ればまだ幼い子どもがいたので、寝かし付けてから仕事の続きをやろうと思っても、なかなか寝付かず、イライラして泣かせてしまったこともありました。子どもの体調が優れないと、仕事中も考えてしまったり……。そんな、どっち付かずで何一つ満足にできず、揺らいでいる私を見かねて、主任の先生が話し合いの場を設けてくださいました。一度、非常勤で一歩引いて見てみるのもいいのではないか、また違ったものが見えて、将来子どもが大きくなって常勤として働くことがあったときにきっと役に立つから、とおっしゃってくださいました。

その言葉で、気持ちがすうっと軽くなり、自分の器量や生活に合った仕事の仕方を前向きに考え直してみようと思いました。常勤を退くことへの不安も正直ありましたが、非常勤として仕事を始めてみると、保育への向き合い方が変わり、新たに見えてくることや得るものも多いことを実感しました。

昨年の三月、年度最後の職員会議の際に、常勤保育士のNさんから、「うまく支えてくれた。本当に助けてもらった。ありがとう」と言っていただきました。私は、以前自分が常勤だったときに、当時非常勤のHさんにたくさん助けていただき、支えられていました。非常勤になったとき、Hさんが私にしてくれたようにやろうと決めていたので、Nさんからの言葉は本当にうれしいものでした。

これからも、子どもたちの笑顔や仲間の言葉に励まされながら、毎日の保育を心のままに楽しんでいきたいと思います。

おばあちゃんの孫育て日誌

不思議が〝楽しい〟日々

瀧田節子
（大学教員）

A〇歳五か月、N七歳、K九歳の三姉妹の孫たちに導かれながらの、何気ない日常を思い返しながら、感じたことをお伝えしたいと思います。

なぜなぜ？　ベビー

初夏、間もなく五か月になるベビーAは、寝返りを盛んに始めたかと思うと、一週間後にはなんとズリズリと動き、はいはいを始めました。ママが「すごいね～」と言葉を掛けると、Aは笑い声を上げています。

「どうしてできるようになるんだろう……教えていないのに、ねぇ～？」「ママ～、ばあばも見て見て、また動いてるよ」。お姉ちゃんたちも不思議に思い、寝転んで観察します。ばあばは、たくさんの赤ちゃんに出会ってきたはずなのに、寝返りやはいはいがどうしてできるようになるのかわかりません。

無藤隆先生が、著書『赤ん坊から見た世界』（講談社　一九九四年）のエピローグで「乳児のおもしろさは、何より、自分の子どもが生まれたときに感じられるだろう。ほんとうに可愛らしいのだ。」と言われています。今、膝を打ってこれに共感しながら、ヒトに備わ

瀧田節子（たきたせつこ）
専門：造形表現教育。東京都の図画工作専科教諭を長く務める。筑波大学附属小学校教諭、お茶の水女子大学附属小学校講師を経て、現在は東洋大学、関東学院大学、清和大学短期大学部で非常勤講師を務めている。

っている能力を獲得していく赤ん坊Aの姿を毎日見て、なぜなぜ？　と不思議がるしかないこの頃です。

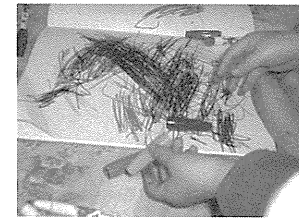
赤ちゃんのスクリブル

前出『赤ん坊から見た世界』〈第Ⅲ部 10―新鮮な世界への歓び〉に「〇歳が、赤ん坊としてのかわいらしさが新鮮に輝いている時期だとすれば、一歳から二歳の赤ん坊は、自分自身が世界に踏みだして、その世界の新鮮さと、それを可能にしているみずからの力に歓喜しているように見える。」とあります。なるほど、孫たちが初めての〝絵〟らしきものを描いたのは一歳の頃からでした。

一歳七か月頃、Kは筆記具があれば手に握り、紙の上で腕を動かすことを喜びました。カラーペンを持つ手は右だったり左だったり、色を変えながらグリグリと動かしていました。写真は、ペンのキャップに興味を持ち、遊んでいるところです。

Nの二歳頃は、線の軌跡に興味を持つかのように、時にはiPadでもドローイングをしていました。

孫たちの「じージ」（文字書き）するきっかけ場面は見逃しましたが、三十数年前の娘が「じージ」するきっかけは、よく覚えています。それは、私が書き物をしていたときでした。一歳の娘は、母が書いた文字の上で何やら手を動かし、まるで線を重ねようとしているかのようでした。

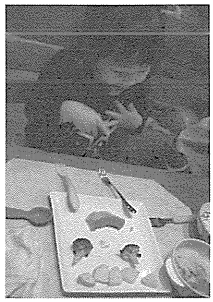

▲カラーペンで（K１歳７か月）

▲iPadに（N２歳）

そういえばその頃の娘は『ちいさなねこ』（福音館書店　一九六七年）がお気に入りで、本にたくさんの「じーじ」スクリブル（なぐりがき）を書き込み（？）ました。この絵本は七歳上の従姉からのお下がりでしたが、すでに多くのページにスクリブルの書き込みがあるものでした。これから、これらのページに、十六年の時に重ねてイメージをつなげて、Aを含めた一歳児のスクリブルが増えていくのかしらと思う楽しみがあります。

お顔大好き

本稿の執筆を機に孫たちの作品を改めて見てみると、「子どものユーモア」満載でした。特にお顔がお気に入りなことでしょうか。二歳の夕食時、お皿に野菜を並べてお顔を作って遊ぶKは、体中で喜んでいます。二歳頃のお絵かきも、お顔への関心が高いようでした。


▲野菜でお顔（K２歳）

海苔（のり）で変身する次女Nは、いないいないばあが大好きで、ばあばが階段を上る足音を聞きつけると物陰に隠れることを六歳まで続けました。N二歳八か月の絵は、中央がママで、お口を開けて笑っているように見えます。周りの小さい円状の形は、家族のお顔。

▲「ママ」（K２歳）

▲海苔で変身（N２歳）

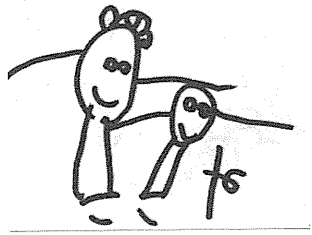
▲「ママとお家の人」（N２歳８か月）

粘土遊びでも、紙粘土を握って生まれた形に、ビーズで目と口を付けて大満足。

▲粘土遊びで（K３歳）

「お友達」いっぱい

前項のNの絵「ママとお家の人」には家族が描かれています。また、左のK三歳七か月の絵は、くりくりヘアのヒトが小さいヒトの頭を「いい子いい子」しているように感じ取れて、ほほ笑ましく思います。この画面の中には登場人物のかかわりも表れていることに、興味を引かれました。



▲「いい子いい子」（K３歳７か月）

そして作って遊ぶ

その後六歳になったKは、折り紙に割り箸を付けたお話の人形を作り、演じてくれました。このことを大切にしていきたいものだと思います。自分の発案により、かかわり合いを表すような作品を、身近な材料で作れたのですから。

思えばお人形遊びもお友達いっぱいでしたね。並べ遊びが面白く、何やらお話が聞こえてきそうです。

なぜなぜ？ 教えていないのに！ ―続く―

▲ペープサートを作って遊ぶ（K６歳７か月）

▲お友達いっぱい並べて（K８歳、N６歳）

保育エッセイ

四季の子ども③
月と木の実の謳（うた）

川田 学
（大学教員）

へそ曲り

自ら輝く太陽があり、その太陽の光で存在をあらわにする月がある。古来太陽と月は、光と影の、能動性と受動性のシンボルとなってきたのだが、その主従が逆転するのが秋だ。

この季節に、いつも思い出すことがある。かれこれ二十年ほども前のこと、信州の農家に住み込んでいた。千曲川のほとりに建つ母屋と離れ、高原野菜の広い畑、遠くには八ヶ岳を望むその場所で、私は二十歳の一夏を過ごした。毎日早朝から畑仕事に精を出し、若い手の指の関節すべてが筋肉痛になるような、厳しい労働だった。農家は三世代の大家族で、間もなく四人目の子が生まれようとしていた。その日の農作業が終わり、たそがれの中、母屋の前でほっと一息つく時間はすがすがしい。家長のおじいさんが、一日使った刃物を庭先で研いでいた。「シャコッ、シャコッ」とリズミカルな砥石の音を背景に、小一と四歳と二歳の三人の子どもたちが無邪気に遊んでいた。母屋からは、料理を作る音と匂いが漏れてくる。実に満ち足りた時間だった。

あるとき、一番上のA君が夕飯の食卓にいないことに気が付いた。どうも何かでへそを曲げた

川田　学（かわたまなぶ）
北海道大学准教授。専門は発達心理学。子どもの見方を柔らかくする発達研究を模索中。著書：『0123 発達と保育』（ミネルヴァ書房）ほか。

らしい。ほうっておきなやー、というおばあさんの忠告を背に聞きながら、お節介な居候は彼を探して家の中を回った。外はもう暗く、月が出ていた。

廊下の突き当たりに階段があり、その三段目くらいにちょこんと彼が座っていた。夏の間に日焼けした顔は暗い階段に溶け込んで、丸い眼の白さだけが、窓からの月明かりに光っていた。私は、不意の出会いにいささかひるんだ。正しくへそを曲げた子どもは、このように神々しい。その前では、にわかな籠絡の試みなど無力であった。数分で諦めて、私は食卓に戻った。ほうっておけばいいんだよぉ、とおばあさんが言った。家族と居候たちの食事が終わった頃、彼は何も言わず食卓についた。そして、母親も何も言わず、残った食事をまとめて息子に出した。翌朝、彼はいつもの朗らかなA君に戻っていて、大きなランドセルを背負って、学校に行った。

ほうっておきなやーというおばあさんの構えと、一人空腹のまま己のへそ曲りと付き合っていたA君の姿が脳裏に残っている。ふと、遠くでドビュッシーの有名なピアノ曲が聴こえてくる。そういえば、この作曲家には“Children's Corner”という作品もあった。「子どもの領分」。

思索的な子とは

何か事に出くわしたとき、すぐに行動しようとする人もいれば、起こった出来事を深く考えようとする人もいる。谷川徹三は、前者を「行動的な人」、後者を「思索的な人」と呼んだ。[注1] 私たちの現実は、確かに行動的に働き掛けなければ打開できないことも多いが、思慮のない行動は問題をいっそう根深くしてしまうこともある。だから、行動する人ばかりでなく、しぶとく考える人が必要であると思う。

どこの園にも、思索的な彼女や彼がいるものだ。思索的というのは、空想的というのとも少し違う。空想的な子は、どちらかというと思考が連想的で速く、行動的であったりもする。言葉にするのも上手で、クラスの人気者になることが多いかもしれない。一方で、思索的な子というのは〝鈍くさい〟という印象を持たれてしまう。「考えること」そのものが丁寧であるから、簡単には言語化しない（できない）。そのために、逆に、考えていない人と勘違いされてしまったりする。

思索的な子の考えというのは、自ら光り輝こうとはしない月のようなものだ。でも、確実に、そこに存在している。そこにどう光が当たるか、光を当てるか。

太古の縄文時代に、私たちの祖先は定住生活を始めた。長い遊動の歴史から農耕型の社会になるまでの間をつないだのは、木の実たちの功績であったという。秋にたくさんの実りをもたらす列島だからこそ、農耕技術の未発達な時代の〝定住革命〟が可能だった。[注2] それ以前の、一年中獣を追いかける行動的な暮らしに代わり、冬場の保存食を加工するための黙々とした作業の時間が、秋に生まれた。この時間が、縄文人に考えることを促したのかもしれない。独特の文様が付けられた土器は、ドングリを煮るために作られた。

秋と思索との関係はドングリが媒介している、と言ったら大げさだろうか。園庭で遊ぶ子どもたちのポケットにも、実りの秋がやって来る。辺りにはいつの間にかひんやりとした空気が混じっている。三歳児が、砂や草と一緒に、小さな手いっぱいに握りしめたドングリを見せてくれる。両の手で挟むようにドングリを持って、顔の前でじーっと寄り目になっている子もいる。そのしぐさは祈りにも似ている。縄文の遺跡からは、幼子の足形を押した土器片が見つかるという。[注3] 動き回る足から取ったにしてはきれい過ぎるという。その土器片は、大人の墓跡から出るそうだ。

ドングリに支えられた暮らしは、祈りの文化とも深いつながりを持っているのではないか。

ある秋の事件

木の実といえば、以前、こんな事があった。長女の通う小学校で、お昼休みが終わって午後の授業が始まろうというとき、一年生の教室にあらぬ臭いが漂った。担任の先生は、学級の子のパンツを一人一人調べた。二十八人全員、無実であった。ところが、一人くさい子がいた。パンツは汚れていないが、臭いの源はどうもこの辺りではないか……。ふと、その子が制服のスカートのポケットに手を突っ込んで、ぐちゃぐちゃになった何かを出した。つぶれた数粒のギンナンだった。先生はおののきながらも、すぐに着替えさせ、やがて午後の授業が始まった。

その日、娘がなぜか下だけ体操服で帰ってきたので、理由を聞くと、右のてん末を話したというわけだ。中学生になった娘と、最近もこの話を思い出して笑った。

私「でもなんでまたギンナンをポケットに？」

娘「わぁ、きれいな実だなと思ってさ、お母さんに見せてあげようとしたんだよね」

下だけ体操服で帰ってきたその日にも、同じやりとりをしたことを覚えている。墓跡の土器片の時代から、木の実たちはきっと豊かな物語を運んでくれたに違いない。

注

1 谷川徹三『哲学案内』講談社　一九七七年。谷川徹三は、詩人・谷川俊太郎の実父。
2 西田正規『定住革命：遊動と定住の人類史』新曜社　一九八六年
3 安田喜憲・阿部千春編『津軽海峡圏の縄文文化』雄山閣　二〇一五年

本棚の古典散歩道

『旅の仲間(下)』J.R.R. トールキン作
瀬田貞二 訳（評論社　1972～75 年
『指輪物語』全 6 冊中の 2 冊目）

※現在、この版は入手できません。
　同社より新版が刊行されています。

『指輪物語』
－ 創造世界の魅力 －

評者　荻原万紀子
(教員)

幼少の頃、信州の田舎に行くと、小学校教員だった叔父がよくお話を聞かせてくれた。後年、小泉八雲『怪談』のリメイクであったことがわかったが、主人公はいつも私たち姉妹で、昔のどこかの住人になっていた。私たちはハラハラドキドキしながらお話を聞いていたものだ。今のこの現実ではない、どこか別の世界の住人になることは、それだけで心ときめくものがあった。

大学生になって、神田の本屋さんを訪ねるたびに目に入り「中学生から 一〇〇歳まで」のうたい文句が気になっていた、しかし長そうな（当時六冊）『指輪物語』を読むことになったのは、三年生の冬休みだった。休みに入る前に友人が最初の二冊、『旅の仲間（上・下）』を貸してくれたのだが、そのときの彼女の言葉は忘れられない。

「始めの三十ページは後で読めば面白いが、まずは飛ばしてよい。この二冊を読んで面白

荻原万紀子（おぎはらまきこ）
お茶の水女子大学附属高等学校元教諭（国語科）。ＮＨＫラジオ「高校講座古典」講師。今春大阪に引っ越してきました。文楽の楽しさを皆さんに知っていただきたいです。1954 年生。

かったら、後も貸してあげる。つまらなかったら後は読まないほうがよい」

この賢明な忠告を、以後、私もこの物語を人に薦める（あるいは貸す）たびにまねた。

律儀（愚直）な私は、始めの三十ページ（序章）を、投げ出しそうになりながら何とか読んだ。その後はもう夢中である。「黒の乗り手」が恐ろしく、「馳夫（はせお）」の登場に緊張し、「カザド・デュムの橋」では魂がつぶれ、まさに作者の狙い通りに「はらはらさせ」られて瞬く間に二冊を読み終えた。それが元日のことである。「どうなるんだ、この後は⁉」「どうしてくれるんだ！」賢明で親切な友人を呪いながら三が日を堪えて、四日に本屋に走った（当時、三が日はみんな普通に休んでいた）。この年末年始の休暇は一家で信州に帰省していたのだが、上信越道などない時代、車の旅は碓氷峠をバイパスで越えていた。帰途、父が運転する車の中で、カーブの連続にもめげずに読みふけり、家族をあきれさせた。

こうしてこの年の冬休みは終わった。貸してもらった最初の二冊も自分で買って、また全部読み直したことは言うまでもない。

物語の成り立ち

二十世紀最大のファンタジーといわれ、『ハリーポッター』はじめその後のあらゆるファンタジーに影響を与えているこの作品の魅力は何だろうか。

よく知られているように、言語学者であったトールキンは、古代の響きを持つ美しいエルフ語を創り出し、その言語を使わせるために神話を創った。従って、没後に発表された『シルマリルの物語』などは、『指輪物語』や『ホビット』（邦題『ホビットの冒険』）よりも（断片的には）先に生み出され、彼の子どもたちに語り聞かせられていたようである。トールキンは書簡の中で、母国イギリスが他

の国々と異なり、「質の良い」「固有の物語」を持たないことに若い頃から心を痛めていたことを記し、「壮大な宇宙創造の物語から、ロマンチックな妖精物語に至るまで、多かれ少なかれ一貫性を持った伝説の体系を創ろうと思う。純粋に私の国イギリスに捧げるために」と語っている。子どもの頃から北欧神話に興味を持ち、その興味が高じて研究者になった彼は、早くから壮大な神話体系を創り上げようとしていたのだ。そしてその中からホビットという種族が生み出された。

これもよく知られている（伝説化されている？）ことだが、オックスフォード大学で学生の答案に飽き飽きしていたトールキンは、白紙で出された答案用紙を見てほっとして（このくだりに突っ込みを入れることは避けておく）、「地面の穴のなかに、ひとりのホビットが住んでいました」と書きだした。

こうして『ホビット』が誕生、一九三七年に出版されるのだが（そしてその好評から続編としての『指輪物語』が書き始められることになるのだが）、『ホビット』執筆中に、トールキンには次の構想が生まれていたようである。だが『指輪物語』が刊行されたのは一九五四～五五年であるから、この執筆には二十年近くを要したことになる。

もちろん『ホビット』も十分壮大でワクワク感のあるファンタジーである。登場人物（人とは限らないが……以下同様）の魅力、全編にわたるユーモアセンスも申し分ない。旺盛な食欲が肯定されているのもうれしい（私はこれを読んだ後、朝食にベーコンエッグを作りたがるようになった）。このお話は、冒険物語としての約束を踏まえている。主人公の成長、重要人物の死、ハッピーエンド、そしてたまたま主人公にもたらされてその助けを受けることになる「魔法の〇〇」。

しかし『指輪物語』の中心に据えられるこ

とになった魔法の指輪は、単なる便利で不思議な指輪ではなくなった。それは「すべてを統べ」る「一つの指輪」である。作り主にして力を取り戻しつつある冥王サウロンの手に渡してはならない。しかも、持つ人に邪悪な力を与えるこの指輪を自分のために持つことも許されず、サウロンの本拠地モルドールにある「滅びの山」の火口に投げ込んで焼却することだけが取り得る道である。その任務を自ら担ったホビット、フロドを中心に九人の仲間が結成される。

作品の魅力

『指輪物語』は善悪の二項対立で成っている。ただし、その善も悪も絶対的ではない。サウロンも堕落した身であり、初めから悪の冥王であったわけではない。魔法使い中、最も力を持っていた白の賢者サルマンも、力と知識を求めた結果、堕落した。まして指輪が手中にあるこの状況下、指輪の力でサウロンと戦いたい欲求は誰にも生まれ、葛藤することになる。フロドから指輪を奪おうとするボロミアも、私利私欲でそうしたわけではない。そして、フロド自身も例外ではない。

この物語の世界は、勧善懲悪でもハッピーエンドでもない。

私たち自身が生きている世界も勧善懲悪ではあり得ない。悪い奴がのさばっている（ような気がする）し、努力をしても苦労をしても、それが報われるとは限らない、いや、報われないことが多い。だが、それでも（ことによるとダメ元でも）自分がするべきだと思ったことを放置することはできない。フロドが「やっとの思いで口を利」いたように――わたしが指輪を持って行きます――。

私たちは、他の誰でもない、自分が自分に課した戦いを生きなければならない。邪魔が現れないことはないが、援助の手も差し伸べ

られる。その邪魔者も援助者もまた自分たちの戦いをしているのだ。ボロミア・ファラミア兄弟のように。そしてボロミアは、指輪への渇望から堕落しかかるが、最後に命を犠牲にして若いホビットたちを守ることによって「打ち勝った」（アラゴルンが贈った言葉）。

この物語の魅力はさまざまあり、構築された世界の体系、そしてそれがヨーロッパ北方の神話・伝説を踏まえていること、また登場人物（伝承の人物たちも含めて）の多彩さ、もちろん、エルフ語やルーン文字等トールキンの創作になる言語……きりなく挙げられるのだが、私自身にとっては、何よりも、現代を生きる私たちの人生を照らすものであることだ。

使命を果たしたフロドは、つかの間の安息を得るが、それも長くは続かない。

私たちは何かを達成しようとして努力をする。運良くそれが達成できれば満足を得られる。だが、それで終わることはない。次の課題が目の前に現れる。その繰り返しが生き甲斐なのか徒労なのか、おそらくその両方なのだろう。

若かった頃は、かっこいい人に目を奪われた。ガンダルフ（女子大生としては渋いか？）、アラゴルン。今も彼らは大好きだが、フロドの思いが身に染みる（映画ではその要素は捨象されていたけれども）。ボロミアの思いも胸に迫る。人生のいろいろな時期にいろいろな味わいを楽しめるのが、名作というものだろう。これだけ長い物語を何度も読ませるところも、この作品の力というものに違いない。

人間＝創造する生き物

敬虔（けいけん）なクリスチャンであったトールキンによれば、神によって創られたこの現実すなわち「第一の世界」に生きる人間は、神から与えられた空想力などの能力によって「第二の

世界」を創り出す。トールキンはこのような人間の行為に、神の創造の業に準ずるものとして「準創造」の名を与えた。そして『指輪物語』執筆の一番主な動機は、「本当に長い話で腕試しをしたいという物語作家の欲求である」という。「読者の注意をひきつけ、おもしろがらせ、喜ばせ、はらはらさせ、あるいは深く感動させるような長い話を書いてみたいと思ったのである」と。

最後に、翻訳について触れておきたい。すっかりこの世界にはまった大学生の私は、原作を買ってみた。音韻面も日本語訳（瀬田貞二氏）はよく工夫してユーモア感も失わないように訳されていたが、詩になると押韻はいかにも難しく、原作でリズムを味わうのが最良だった。しかしながら、この比較で私に最も感動を与えたのは、日本語訳の妙である。

私の魂をつぶした「カザド・デュムの橋」。バルログに襲われて絶体絶命の場面、一行を率いるガンダルフは、単身この怪物に立ち向かい、「ささまは渡ることはできぬ」と言う。このセリフを原典で見ると、“You can not pass”なのだ。なんか違わないか？　と英語文化に不慣れな日本人として思う。彼はこのセリフを三度言うのだが（三度目だけ「！」がつく）、瀬田氏の訳では、二度目が「ささまは渡れぬぞ」、三度目そして最後は「ささまは通すことができぬ！」――この使命感・意志力みなぎる訳し方はどうだろう。

こうしてみると、翻訳も創作の要素がありそうだ。

神に似せて作られた人間は、創作が不可欠の生き物なのだ。私たちも、子どもにお話をするとき、あるいは家族に今日あった話をするときでさえ、ささやかな味付けをしていることが多い。だって面白いと思ってほしいから。

確かに人は新しい世界を創り出す生き物であるに違いない。

リポート

こども園をつくる

―文京区立お茶の水女子大学こども園の記録―

Vol.2／開園から3か月　始まりの日々

宮里暁美

一年半の準備期間を経て、こども園は、無事、平成二十八年四月一日に開園しました。初年度は五歳児を募集せず、〇～四歳児までの編成でスタート。七十名の子どもたちと三十名の保育者や職員たちの生活が始まりました。職員は、新任一名以外は全員が公私立の幼稚園や保育園、こども園での経験を有しています。多様で豊かな経験を積んだ保育者や看護師、栄養士、職員たちが集まりました。

新しい園の保育を始めていく上で大切にしようと確認し合ったことは次の三点です。

①それぞれの経験を生かし合うこと

②同時に「今ここで新しく始める」という意識を持ち、保育を創造すること

③そのために「目の前の子どもの姿や思い」をしっかり捉え応答的にかかわっていくこと

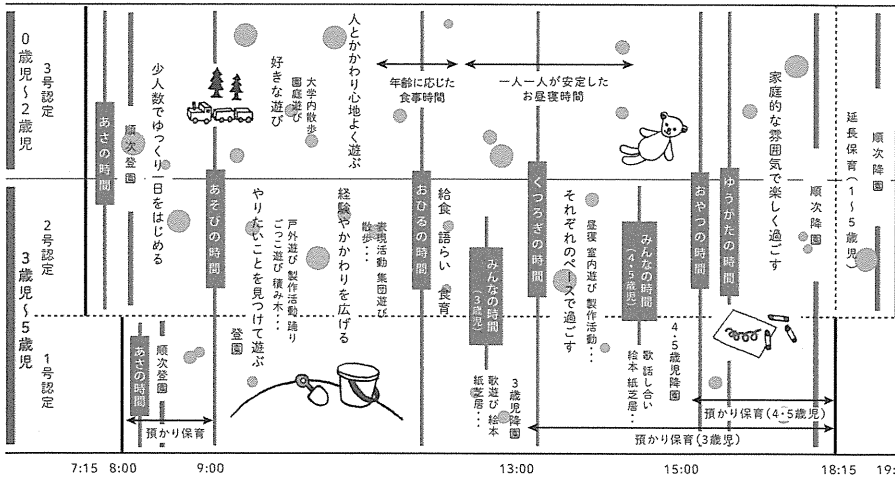
すべてを一から始めていく日々、一つ一つのことを確かめ合いながら、一歩ずつ歩みを進めている毎日です。このようにして始まった日々の中で見えてきたことを紹介します。

宮里暁美（みやさとあけみ）
お茶の水女子大学附属幼稚園副園長、十文字学園女子大学教授を経て、文京区立お茶の水女子大学こども園設立後、園長に就任。

多様な時間帯を過ごす子どもたち

四月一日、2号・3号認定（保育園）の子どもたちが登園。元気いっぱい過ごす子どもたちの歓声が園中に響きました。一方、1号認定（幼稚園）の子どもたちは、その一週間後、四月八日の入園となります。この差は大きな差になってしまうのだろうかという一抹の不安が心をよぎりました。しかし、それは取り越し苦労でした。「みんながそろう日」を心待ちにする気持ちが子どもたちの中にあったのです。こうして、みんなのこども園がスタートしました。

こども園では、保護者の就労の有無や介護、用事などの状況によって、子どもたちが園にいる時間帯が違います。同じ子どもでも、日によって時間帯が変わる場合もあります。実に多様なのです。多様であることを大切にして育ち合う保育の創造、それこそがこども園の大きな課題であり可能性であると考えます。

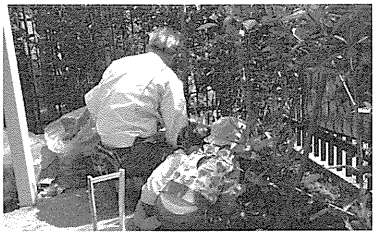


▲こども園の１日の大まかなイメージ（文京区立お茶の水女子大学こども園パンフレットから）

憧れの存在に出会う

こども園の敷地は、大学の南門の横、以前は車庫があった場所で、歩道沿いの植え込みはほとんど手入れをされていない状態でした。生い茂る笹をかき分けるようにして花苗を植えてスタートしましたが、笹の勢いが強く、花が育ちにくい状態でした。花が育つためには笹を抜いていく必要がありますが、笹は根を深く張り巡らしており、それを根絶やしにするのは並大抵のことではありません。この困難な作業に取り組んだのが用務員のSさんでした。

一階の保育室には、〇～二歳の子どもたちがいます。ガラス越しにSさんの姿がよく見えていたのでしょう。毎日、笹と格闘するSさんの姿が、子どもたちの心を捉えるのに、そんなに時間はかかりませんでした。



▲Sさんのそばにはいつも子どもたち

Sさんの周りにはたくさんの子どもたちが集まり、仕事を手伝おうとする姿がよく見られました。

植え込みの所に座り込み、「Sさんやる！」と土を触る子どもたちの姿からは、特別なことをしている、という誇りのようなものが感じられました。

丹念で丁寧な仕事は子どもたちの心をつかみます。子どもたちの生活の場であるこども園の中に「丁寧な仕事」があることの意味に気付かされた出来事でした。

▲Sさんのすることは何でもやりたい

▲真剣な指先

散歩の中で子どもたちが体験していること

こども園では、ほぼ毎日散歩に出掛けます。四歳児もみじ組の子どもたちの散歩に同行する日々の中で気付いたことがあります。子どもたちは、「ここでこんなことをして遊んだ」という場の記憶を残しながら、その場所を通っているということです。

生協の食堂のガラス窓は鏡のようだということに気付き、まねっこ遊びをしてからは、その前を通ると「あ、いた！」という声が上がります、高さ一メートルくらいの塀がある所では、手だけを出して人形劇のようにして遊んだことがあるようで「あ、ここ！」とうれしそうに言いながら遊びだす様子がありました。日時計も大好きな場所の一つで、今日はどうかなと、影を不思議そうに見ています。珍しく献血車に出会い、「何しているの？」と聞いたこともありました。大学は授業中で、係の人は手が空いていたのでしょう、ゆっくり説明をしてくださり、「みんなも大きくなったら協力してね」と声を掛けてくれました。

これらの姿を見て気付いたことがあります。こども園の子どもたちが散歩の中で出会っているのは、自然だけではない。人やモノ、コトと出会っているのだということです。

今回、「第二園庭」として整備されたのが、旧学生会館前の広場です。建物の改築に伴い広場が広くなり、そこに新しい土や砂が入り、子どもたちが安心して遊べる環境になりました。この場所で遊んでいると、大学附属のナーサリーや学校の子どもたちに出会

◀▲「第二園庭」の広場でゆっくり遊ぶ

うことができ、喜びになっています。樹木が生い茂り、走り回っても大丈夫な場所で思い思いに遊ぶ時間は、伸びやかで、まさに園庭で遊んでいるかのような気持ちになります。今後は、さらに遊びの継続や深まりが生まれる工夫をしていきたいと考えています。

眠りについて考えたこと

敷地面積に限りある中、私たちはオープンスペースを積極的に取り入れました。一階は一、二歳児の保育室、二階は全体がオープンスペースです。

室内は、木の床の暖かさと窓から見える空や木々の緑が空間に伸びやかさを与え、すがすがしい気持ちにさせる空間になりました。しかし、広くて開放感がある

▲オープンスペース

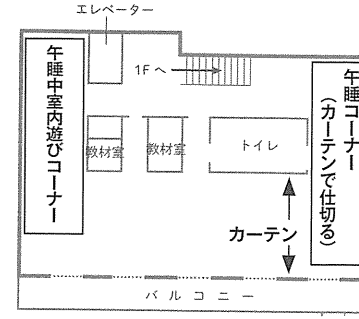
という良さは、同時に、落ち着けないという弱点を持っていました。その影響は、午睡のときに現れました。午睡する子どもたちとその他の空間を区切るのはカーテン一枚です。壁で仕切られていないので音が走ってきてしまい、入園当初の不安定さに空間の不安定さが重なり、寝ようとしても眠れないという状況が発生してしまいました。午睡が不足した状態で帰宅した子が夕食を食べながら寝てしまったという声が保護者から寄せられ、私たちは頭を抱えてしまいました。子どもたちが安心して遊び、安心して眠れる園をつくっていくことは、園づくりの大前提だからです。

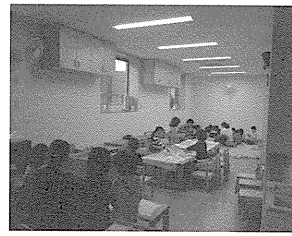
こうして心地よく眠れるための努力が始まりました。1号認定の三歳児は十三時に降園します。その後から午睡の準備が始まります。電気を少しずつ消し、話し声も静かにして、眠くなる雰囲気づくりを進めていきました。午睡しない四歳児は園庭で遊び、まだ眠くないという何人かの三歳児は午睡コーナーとは

離れた場所で遊ぶことにしました。眠りたくなる場の雰囲気づくりに心を砕き、「眠くてたまらない」という子どもから眠れるようにして眠りの輪が広がっていくという流れを大切にする中で、確実に眠れる状況ができてきました。

そして四月末、運命の雨の日がやって来ました。それまでは晴天続きだったので、四歳児たちは園庭で過ごしていました。しかし外は雨。外に出ることはできません。眠る子と眠らない子がカーテン一枚で仕切られた空間にいて双方共に満たされるということができるのだろうかと、少々悲観的になりながら私も保育に加わりました。しかし、それは杞憂に終わりました。

眠っている子どもたちから一番離れた場所に、落ち着いて遊べるコーナーをつくり、そこで保育者もゆっくりかかわりながら過ごしてみました（下図参照）。しばらくして午睡コーナーを見に行くと、そこではスヤスヤと眠る子どもたちの姿がありました。




▲集中して遊ぶ

▲ぐっすり眠る子どもたち

「寝ないという子」の中には、「本当は寝たほうがいい子」が交じっています。「でも今は寝たくない」というその気持ちを受けとめられる中で、いつか「寝ていく」。そのプロセスを大切にしたい、と気付かされました。この環境だったからこその気付きかもしれません。

子ども学探訪

1 7 28

幼児の教育

アーカイブズとの対話⑥

56 109 110

「アメリカ教育使節団報告書」を通して見る戦後幼児教育への希望（前編）

織田望美
（大学院生）

「幼児教育が国の将来への基本であることは、いつでもの真理である」「しかも、新日本建設という、未曾有の変革と、まっしぐらの躍進との今日において、その担当する使命は、特に、殊に、大きく又深いものである」[注1]。これは、戦後復刊された『幼児の教育』第一号に寄せられた一文である。戦後の混乱と廃墟、そして占領という特殊な状況の中、新しい未来の創造を目指し立ち上がった人々。本誌の復刊は、そうした人々の思いの結晶として捉えることができるだろう。本号と次号の「幼児の教育アーカイブズとの対話」コーナーでは、戦後における幼児教育関係者の未来への希望がうかがえる記事を連載の形で紹介する。

戦後占領下の一九四六年および一九五〇年、二度にわたって来日したアメリカ教育使節団は、それぞれ日本における教育改革の基本構図を示す文書として、「アメリカ教育使節団報告書」（以下、報告書と略す）を提出した。これを受け、当時本誌の編輯主幹を務めていた倉橋惣三は、各報告書の幼児教育に関する提言内容について解説し、さらにそれらに対する自らの見解を述べた記事を発表している。もっとも、アメリカ人の手によって英語で作

織田望美（おだのぞみ）
お茶の水女子大学大学院博士後期課程在学。戦後占領期における幼児教育改革について、主にアメリカ側の視点から研究を行っている。

成された報告書の訳出や解釈をめぐっては、いまだ議論の余地が残されており、これらの記事に示された解釈や主張はあくまで倉橋個人のものとして捉えられるべきであろう。とはいえ、戦後の幼児教育界を代表する存在として活躍していた倉橋が、報告書に対しどのような見方を示していたのかという点は、実際の報告書に込められていた作成者側の意図と並んで重視されて然るべきではないだろうか。というのも、提示された改革案をいかに受け取るかという点にこそ、当時の幼児教育に対する人々の期待や希望の一端が如実に表れていると考えられ、また、倉橋の解釈や主張は、彼の立場上、一個人の私見以上の意味を持ち得たと考えられるためである。

そこで本連載では、報告書を受け倉橋が発表した記事を通して、戦後幼児教育が目指した一つの姿を垣間見ることを試みる。前編となる本号では、一九四六年三月に提出された「第一次アメリカ教育使節団報告書」を受け、復刊第二号となる『幼児の教育』に掲載された記事を紹介する（本連載ではアーカイブズ記事の再録に際して、旧字体は新字体に、歴史的仮名遣いは現代仮名遣いに改めた。また、誤記と思われる字句にはママと付記した。引用文中の注記は筆者による）。

米国教育使節団報告書中の幼児教育に関する提言と学校教育の下への延長

倉橋惣三

（第四十五巻第二号　一九四六年十二月）

米国教育使節団の報告書中、幼児教育に就ての提言は必ずしも長くない。殊に、幼児教育に対する独立の一章を設けられてもいない。この点は、幼児教育に特に関心を有するものにとって、充分の満腹を感ぜしめるものでは

なかった。しかし、これを以て、使節団が幼児教育に無関心であったとか、無理解であったとかいうことでは少しもない。―中略―

『児童の成長発達の確実な原則から見て、学校施設を更に年少の児童にまで及ぼすことの賢明なことが分る。正規の学校制度に必須な改革が行われ、適当な経費が支給せられる時が来たら、育児所[注2]や幼稚園をもっと多く設けて、これを小学校に組み入れるように勧める』

(文部省訳)

更めて分解を加えるまでもなく、この提言が二つの主点をもつことは明かである。

第一、幼児期への施設教育の必要

第二、その施設は小学校ののママ組織に合体せらるべきこと。

第一の、必要論の根拠としては、児童の成長と発達との確乎たる原則という言葉が用いられている。「確実」の原語は、Soundであり、「賢明なことが分る」の原語は、marantマであり、共に極めて強い言葉が使われている。この報告は心理学の教科書でもなく、教育学の論文でもないから、児童心理の叙述と、幼児教育の論述とをする必要はないのであるし、そうした学説は、定明ママ白なることであるから、その結論が決定提示せられれば足りるのである。そして、その強い決定は寸鉄を以て断じているのである。ただ、即時断行を提言せられていないのは、此の問題の熱心者にとって、聊かあきたらない感を免れないが、わが国財政の実状と、しかも、学校組織全般の速かな民主化完成のために、厖大な経費の国家的負担を予想し要望している使節団としての、いわば遠慮ともいうべきことでもあろうか。この点に関しては更めて論じたいと思っているが、これはどこまでも教育行政上の言い方で、施設的幼児教育の必要そのものの断定は、これがために、少しも弱められはしない。殊に、その断定が表明せられている強い言葉使いは、決

して看過してはならないのである。その後のことは、われらの側の問題であり責任である。

第二の主点は、幼児教育の必要論から一歩進んで、国家の教育組織の中における、幼児育教施設の在り方の実際であって、幼児教育が、どういう軌道に乗って進展普及せられてゆくべきかに関する現実的提言である。この点に就ては、第一主点とちがって、種々の説が立てられるでもあろうし、その説の立て方の方式においても種々の着眼があり得るであろうが、観念的に学校と幼児教育施設とを別に見ることによって此の組入れに反対することは、少くも、此の報告書の立論の本質に対して、合理的でないことは（前述したところの如く）明かである。殊に、幼児教育の熱心者によるその「義務制化」の主張は、学校組織への合体を当然に内包しているものともいえる。いずれにせよ、国の児童全体を対象とすることを本質とする小学校(Primary School)への「組入れられる。」(incorporation)の提言は、幼児教育の、教育組織内における、例外的、埒外的在り方、殊に、そうした社会的感じを是正するものである。幼児はその特殊の心理をもつ。従って、その教育法も特殊性をもつ。しかし、それは、教育の組織として、特殊たることを意味するものではない。「これからの幼児教育、その特殊教育扱いから脱しなければならぬ。」とは、わたくしの所為であるが、使節団報告には、それが現実的実際的に提言されているのである。但し、此の原則的意味が、保育学校なり、幼稚園なりが、独立に設立され、独立に経営せられてならぬということではないことは、いうまでもあるまい。

注

1　倉橋惣三「新日本建設と幼児教育の使命―民主的性格の基本を擔ふもの―」『幼児の教育』第四十五巻第一号（一九四六年十月）p.2

2　原語は nursery schools

そこにいる子が子どもであるということ③
自分の中の「子ども」を手探りする

浜口順子
（大学教員）

散歩する

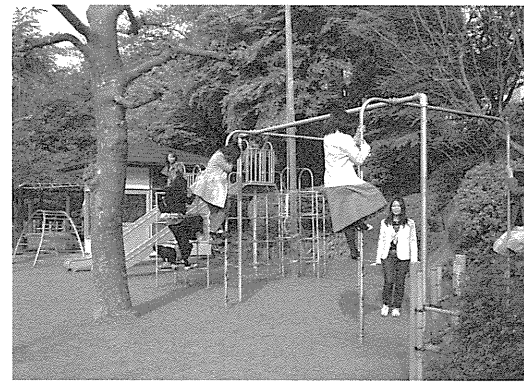
「今日はいい天気なので、外を散歩しましょう」

梅雨入り前のすがすがしい青空の日。歩くと少し汗ばむほどだが、風がかえって爽やかに感じる。今日しかない。私の勤めるお茶の水女子大学のキャンパスは、狭いが、樹木の種類は多い。附属ナーサリーや今年開園した認定こども園の散歩コースでもあるので、最近は小さい子どもたちと学生や教員がすれ違うことも珍しくなくなった。そこを、今日は子どもの気持ちになって歩いてみようということにした。学部一年生向けの保育学入門的な授業。週末金曜の午後三時からのコマということもあり、慣れない大学生活で疲れているだろう心身を癒やそうという狙いもなきにしもあらずだ。体を動かす活動を取り入れ、座っていても「右脳」を活発にしてもらうような授業を心掛けている。受験勉強でカチカチになっている（に違いない）一年生の頭と心をほぐしたい。受講者は三十名余り。ほとんどが十八歳。十八年

浜口順子（はまぐちじゅんこ）
お茶の水女子大学教授。本誌編集主幹。

間に培った「子ども観」も、ほぐしたいものの一つだ。

荷物は教室に置いて手ぶらで歩いたが、携帯電話を皆ほとんど持っていて、要所要所で写真を撮っている。アジサイ、タイサンボクの花がきれいだ。ユリノキの葉の形が面白いと騒ぎになる。こういうことでもないと、キャンパスの樹木などほとんど見ないで卒業してしまうものかもしれない。自分の子ども時代や故郷を思い出して「懐かしい」と感想を書いた学生も多かった。親のことを思い出した学生もいた。「私はアジサイが大好きなので、お茶大に色とりどりのアジサイがたくさん生えているのを見られて、とてもうれしかったです。母もアジサイが好きなので、今日撮った写真を送ってあげようと思います」。



幼稚園で遊ぶ

この授業では必ず一回、附属幼稚園を訪問し、子どものいない幼稚園空間を学生に感じてもらう。今年創設一四〇周年の特色ある幼稚園（今の場所に移転して八十年以上たつ）であることを学生は知識としては知っており、外から見ると古めかしく堅牢で近寄りがたい雰囲気の漂う建物でもあるので、中に入ってみて、まず親しみを感じてほしいというのが第一の目的だ。「森のような場所に木製の遊具があり、絵本の中の世界にいるようでした」「小さい

椅子や絵本、子どもたちが描いた絵などを見ていると、昔を思い出してとてもあたたかい気持ちになりました」。

こうした懐かしさや「子どもの小ささ」を感じるほかに、自分自身が子どもに返ったような印象を受けている人が多いのも面白い。今年の授業では、園庭の遊具や、遊戯室の大型積み木やカプラ（薄くて細長い、すべて同じ形の木片から成るブロック遊具）で遊ぶ時間を設けたが、その感想で次のようなものもあった。「何か作りたくなったり、触ってみたくなる楽しいものがたくさんあって、先生も『自由に遊んでいいよ』と言ってくださったので本当にわくわくしました。自由にやりたいようにさせてもらえる、というのはこんなに楽しいものなのかと驚きました」「小さい頃、おままごとをやらなかった私にとっては、今すぐにでもおままごとをしたい！という子ども心に返ることができてうれしかった」「懐かしい絵本がたくさんあり、自分が今まで多くの絵本を読んでいたことに驚いた」「幼稚園の中にいるだけで落ち着いたので、幼稚園は他の建物とは違う特別な場所のように感じました」。過去に持っていた童心に「返る」というよりも、今新たに自分の中にある「子ども」を幼稚園という場所で感じているという印象がある。

赤ちゃんとお母さんに出会う

一年生の入門授業や二年生の保育学の授業では、〇歳の赤ちゃんを育てる大学院生や、卒業生の「お母さん」に授業協力をお願いして、出産や分娩、育児の経験談や、仕事や研究との両立の話などをしてもらう。そして、赤ちゃんを抱っこさせてもらう。赤ちゃんが眠ってしまったり、学生が多過ぎたりすると無理なのだが、なるべく近くで触れられるようにしてもらう。写真を見てもわかるように、赤ちゃんのそばで、学生たちの表情は全く変わる。輝く、と言ってもいい。また、話をする側の母親も、誇り高く、あふれるように学生に話をしてくれる。授業の効果云々というよりも何よりも、その雰囲気の素晴らしさに、私自身ほれぼれしてしまう。

数年前、卒業して助産師になった女性がいる。同窓会で再会したときに、実はこの授業で赤ちゃんとお母さんに会ったことがきっかけだったと話してくれた。

論考

保育の環境が纏（まと）う「時の経過」

松島のり子
（大学教員）

「環境」の捉え方

形があるものも形がないものも、すべての存在は「時の経過」を含んで存在する。例えば一枚の紙も、紙となる前には、原料となる植物が育ち、紙として加工されていく過程がある。紙となった後には、誰かが文字を書き、それが大切に残されていくこともある。このように考えてみると、無機質に思えるものも、人の手が加わって形を成し、その後も続くさまざまな過程を思い浮かべることができるのではないだろうか。「環境」の捉え方を深めることは、子どもを育む豊かな保育の環境の創造につながり得る視点の一つであると考える。

筆者はこれまで、保育を学び、保育を実践し、保育に関する授業に携わってきた。学生として保育を学ぶ中で、「環境」の捉え方が広がった。保育者として実践する中で、「環境」を通して行う保育と、その営みの中で人間が育つことを実感した。教員として講義を担当させていただくようになって以来、日々の生活の中で「環境」を意識することが増えた。

また、一研究者としては、保育の制度や政策の歴史研究に取り組んでいる。歴史をひも

松島のり子（まつしまのりこ）
福山市立大学教育学部講師。専門：幼児教育学、保育制度・政策の歴史。著書：『「保育」の戦後史 ― 幼稚園・保育所の普及とその地域差』（六花出版　2015年）。

とこうとすると、残されたさまざまな史料との対話を通して、当時を生きた人々の様子や思いをうかがい知ることができる。

こうした経験を振り返りつつ、改めて保育の「環境」に思いをめぐらせる中で、形はなくても人間の発達に影響しているであろう、環境が纏う「時の経過」について考えてみたいと思い至った。

自然の中で

筆者が保育を学んだお茶の水女子大学附属幼稚園の園庭の「お山」には、大きなイチョウの木が、幼稚園の生活を見守るように佇んでいる。かつて倉橋惣三は、「大銀杏と藤棚とは、お茶の水幼稚園の二つの大切な自然の魂である」[注1]と記した。夏には青々と葉が茂り、秋には黄色に色づき、冬になると葉を落とし、春が訪れる中で再び葉をつけていく。お山のイチョウの木は、背丈が高くなり、幹が太くなり、樹齢を重ね、そして、幼稚園の中に守られながら、時を過ごしてきた。その歩みの中で、子どもたちとのさまざまな出会いやかかわりがあったことが想像される。

また、お茶の水女子大学には、正門から講堂に続く道にイチョウ並木がある。この道を、十一年間通い続けた。現在のキャンパスは、関東大震災後の一九三二年に御茶ノ水から移転してきたものである。大学の正門が完成したという一九三六年六月の写真[注2]には、若かりしイチョウの木を見ることができる。

平山許江によれば、「日常のありふれた風景は環境の根幹となり、その人の精神の中核をつく[注3]」り、「環境は人の心にもはたらきかけている[注4]」という。たとえ日常的に意識していな

▲「正門」（お茶の水女子大学デジタルアーカイブズから）

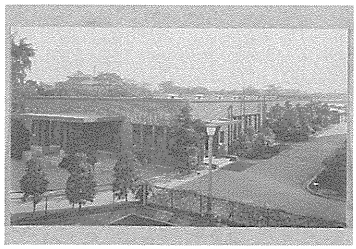
くても、道に落ちたギンナンの実やその匂い、黄色の落ち葉がじゅうたんのように一面に広がる様子から、ふと季節の移り変わりや自然の魅力に気付くことがあった。このイチョウの木々にも、今に至るまで、そしてこれからも続く「時の経過」がある。決してイチョウのほうから積極的に働き掛けてくるわけではないものの、そこにある限り、見る人や近くを通る人の感覚に響き続けていくのであろう。

施設や設備の中で

お茶の水女子大学附属幼稚園の現園舎は、一九三一年に竣工し、翌一九三二年十二月に移転が実施された。一九三三年より保育を開始して以来、子どもたちが生活し、保育者が保育を営む場であり続け、現在に至っている。園舎の周りの風景は変わっても、園舎自体は、移転当初の面影を残している。[注2] 二〇一三年には、登録有形文化財として「文化的価値を高めていく」ことと、「生き生きした保育活動がより一層展開されていくための改善」を目的として、園舎の大規模改修工事が行われた。工事を経て、「大切に引き継いだものと新しく工夫したところが溶け合」う幼稚園となった。[注5]

園舎に限らず、玄関を入って真っすぐにつながる廊下、その先にある遊戯室、各保育室のステンドグラス、保育室内の棚、机や椅子、窓枠、保育室と園庭をつなぐ三和土（たたき）、その間にある数段の階段、階段横の手すり、園庭の遊具や砂場など……、そこかしこで園舎が歩んできた「時の経過」を感じ、新旧が共存する中に醸し出される、お茶の水女子大学附属幼稚園ならではの雰囲気に接することができる。

これまで、附属幼稚園に関する戦前、戦中、



▲「附属幼稚園正面」（お茶の水女子大学デジタルアーカイブズから）

戦後の写真を見る中で、そこに写る、切り取られた場面は確かにそれぞれの時代の出来事でありながら、現在も同じように目にすることのできる景色に出合ってきた。幼稚園の施設や設備に刻み込まれ、染み込むように息づいている歴史や、その時を生きた人々の足跡があることを感じていた。

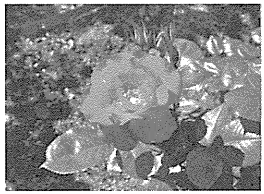
新たに始まり、確かに歩まれてきた「時の経過」は、園全体や園生活を包み込むように環境を成す一部となり、園の雰囲気や風景をつくり出す。それが保育の環境となって、幼稚園で生活する子どもたちの「心にもはたらきかけて」いた（る）のではないか。きっと、日々保育を実践する先生方の心にも、感覚に響くものがあるのではないかと予想する。いつか、先生方にお話を伺ってみたいと思っている。

地域の中で

二〇一五年四月より、縁あって広島県福山市で生活している。福山市は、今年二〇一六年七月一日に市制施行一〇〇周年を迎えた。

福山市では、「市の花」の一つに「バラ」が制定され、市民にも親しまれている。市内には各所にバラが植えられており、シンボルや施設の名称としても、よく目や耳にする。また、市では「思いやり　優しさ　助け合いの心」を表す「ローズマインド」を育むことが目指されている。戦後復興を遂げる中で、一九五六年に、市民と行政が協力してバラの苗を植えた。このことを契機に、「ばらのまち福山」としての歴史が始まった。[注6]

地域には、地域が歩んできた固有の歴史がある。福山市において、バラは「日常のありふれた風景」の一つとなっている。こうした環境が、地域や「土地柄」をつくり、地域に生きる



人々や子どもたちに、植物に触れて自然の恵みを感じたり、人としての心もちを考えるきっかけとなったりと、さまざまな形で働き掛けていると考えられる。

保育の環境が纏う「時の経過」

「時の経過」は形がなく、意識されにくいかもしれない。しかし、あらゆる存在が纏っている。それが、保育の環境としての意味を持って、人間の発達につながり、影響する面があると考える。前出の平山によれば、「子どもは常に身体の感覚のすべてを使って対象とかかわり、対象の全体をまるごと受け止めている」[注7]という。子どもは、こちらが考える以上に、環境が纏う「時の経過」の働き掛けを感じているかもしれない。

保育の環境は、人為的意図的に構成される。それが「時の経過」を纏うからこそ、意図を越えて人間の発達に影響を及ぼし得るものがあると考えられる。そうした環境の働き掛けを、子どもたちや保育者がどのように受け取っているのかということも含め、今後も追究していきたいと考えている。

注

1 倉橋惣三「子供讃歌（一四）」『幼兒の教育』第四十九巻第十二号　一九五〇年　p.35
2 お茶の水女子大学デジタルアーカイブズ「新校舎に学ぶ」（一九三六年十月）http://archives.cf.ocha.ac.jp/pic010_shinkousha.html
3 平山許江『領域研究の現在〈環境〉』萌文書林　二〇一三年　p.37
4 前掲書『領域研究の現在〈環境〉』　p.39
5 宮里暁美「大規模改修工事の中で―子どもたちと創り上げた工事中の保育―」『幼児の教育』第一一三巻第四号　二〇一四年　p.70
6 福山市「ローズマインドについて」http://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/site/rosetownfukuyama/22390.html
7 前掲書『領域研究の現在〈環境〉』　p.137

子ども学のひろば

お便り POST

◇読者から◇

日本保育学会第69回大会（in 東京）に行ってきました。

国際シンポジウム「ヨーロッパ・ベルギーにおける保育の政策と実践」に参加した。

シンポジストであるヘント大学のミシェル・ヴァンデンブロック氏が語るヨーロッパにおける保育の政策、課題から、日本の保育・子育て支援における実践のヒントを得られた思いである。多様性を大切にすることに、より重点を置いていくことこそが、これからの保育・子育て支援の鍵となるのではないか、と個人的には考えさせられた。(I)

今年初めて、留学生として保育学会に参加することになりました。今回のテーマは、「乳幼児期の教育／保育の再構築―研究と実践と政策を越境する―」でありました。

二日間の大会では、海外・国内の保育にかかわる多様な分野に分かれて、発表やシンポジウム、講演などが行われ、さまざまな分野（大学、現場、研究所など）の人々に出会うことができました。一方に偏らずに、幅広い分野で、乳幼児期の教育・保育について工夫していることに気付きました。(C)

初めてのポスター発表。興味を持って足を運んでくださった方々と、近い距離で話し合えたことが何よりの収穫でした。そして私自身も興味の赴くままに会場を歩いていると、学生時代の同級生にバッタリ！　日頃の活躍は知っていたけれど、直接語り合えたことはいっそう励みになりました。また、郷里の方とも出会いました。遠くでも保育を語り、発信している方がいることを知ってうれしくなりました。人と人との出会い、つながりの大切さを実感した一日となりました。(S)

絵本の紹介
『おいで、フクマル』
くどうなおこ 作／ほてはまたかし 絵　小峰書店　2009年

『あるひ あるとき「おーい おいで」と だれかに よばれて ぼくは うまれた。なまえは「フクマル」。ぼくを このせかいに よんでくれたのは だれ？』

ぼく＝フクマルは、保手浜さんが描く通り、つぶらな瞳の、顔の大きな、犬（であるらしい）。

『みんな ぼくと あそびたがっている。』『ちきゅうとも おひさまとも あそぼう！ いつまでも。』

そうか。そうなんだ。人は皆、誰かに呼ばれて、生まれてきたんだ。いつもながら、工藤直子さんの生きるものへのまなざしと寄り添い方は、淡々と温かく強く、優しい。(KT)

本の紹介
『社会の中で居場所をつくる　自閉症の僕が生きていく風景〈対話編〉』東田直樹　山登敬之往復書簡　ビッグイシュー日本　2016年

雑誌『ビッグイシュー日本版』に掲載された往復書簡と対談が収録されている。東田さんは1992年生まれの作家。13歳の時に書いた『自閉症の僕が跳びはねる理由』をはじめ、エッセイや詩集、絵本などの著作がある。

作家 東田直樹の「一ファン」に過ぎなかったという精神科医の山登さんと、10回ごとに攻守を入れ替えてのやりとりには、本にした段階でついたであろう10回ごとの巧みなタイトルがついている。「原始の感覚、未来につながらない記憶」「純粋さ、うしろめたさ、嘘、そして夢」「『共世界へのためらいがちな参入』のために」など。そして、対談の見出しには、「僕は笑ってもらえると、うれしい。悲しんだりされるとつらい。」とある。各回のおおよそを連載中に読んでその都度うなずいたりうなったりしていたが、改めて本書を手にしたくなったのは、各章のタイトルがとても魅力的だったせいも大いにあると言える。(KT)

編集後記

『さとにきたらええやん』というドキュメンタリー映画を公開初日に見た（監督・撮影 重江良樹／製作・配給 ノンデライコ　2015年　100分）。上映後の舞台挨拶で、1984年生まれの監督は「この自慢の子どもたちを見てください、という気持ちで（映画を）作った」と語った。「さと」とは、大阪市西成区釜ヶ崎にある「こどもの里」のこと。誰でも利用できる、「こどもたちの遊びと学び、生活の場」。利用料はいらない。困ったとき、必要なときには宿泊もできる。

出入り口に所狭しと並ぶおびただしい数の靴。「さと」への道をチャリで行く学ランの後ろ姿。「さと」の子どもたちが野宿生活者を訪ね、差し入れなどをする夜まわり活動……。

見終えた今だから、少しだけだがわかる。人が生きるとは人と生きること。人を生きること。しばしば、傍目にも強烈なほどの「しんどさ」があるが、人が人を思い（思われ）、待ち（待たれ）、問い（問われ）、気持ちと言葉を交わし合う（時にぶつけ合う）、そんなふうにしか探し求めることができない、生きていく、ということ。そんな子どもたち大人たちの姿にすっかり惚れ込んでしまって、若き監督はこの映画を撮ったのだろう。本誌今号「ひろば」で紹介した本の「おわりに」に東田直樹さんの書く、「思いが通じた時、人は自分が生きている意味が、少しわかったような気になるのではないでしょうか。今日という日を、明るい気持ちで過ごせるのだと思います」。そんな言葉にも、どこか通じるかもしれない。

子どもも大人も、知らず知らずに「探求」している。しんどく、それ故どこまでも人間くさい暮らしの中で「僕が、私が、私たちが、生きている」ということを。（K）

次号予告　幼児の教育 冬号　2016年12月刊行予定

新企画、新連載が好評！　充実した内容でお届けします。

特　　集　保育現場で気になるコトバ考 12
－「協調性」とは……？ －　前原 寛氏ほか

コーナー　古典の散歩道 第12回　田代和美氏

論　　考　「口演童話」と幼児教育　中村美和子氏

※タイトル・内容が変更になる場合もあります。

幼児の教育 秋号　第115巻　第4号

平成28年10月1日発行
編集発行人／浜口順子
編集担当／田中恭子
発行所／日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発売所／株式会社フレーベル館
電話:03-5395-6604（編集）
振替／00190-2-19640
印刷所／図書印刷株式会社
定価／本体834円+税

©日本幼稚園協会 2016 Printed in Japan

編集委員／伊集院理子
伊藤綾子
菊地知子
佐藤寛子
編集協力／フレーベル館

● ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613（営業）●

配慮が必要な子どもが増え、クラス運営に悩む保育現場の先生たちのために。お一人に１冊、おすすめします！

「気になる子」の未来のために

要配慮児対応・園での工夫

著：上原 文（精神保健福祉士）
定価　本体1,900円+税
21×18cm　128ページ

現場で要配慮児にかかわって35年。著者の経験による解説と豊富なカラー写真で、要配慮児の特徴と具体的な対応法がわかります！

109-61　ISBN978-4-577-81403-1

イラストと写真がたくさんで理解しやすい！

CONTENTS（一部抜粋）

第１章「気になる子」について理解を深めましょう

- ●子どもたちのために環境や保育スタイルの見直しを
- ●スケジュールについての考え方
  —もう一度考え直す必要があります
- ●生活のリズムを整えることは、すべての基本
  —その意味をもっと伝えていく必要があります
- ●生活習慣について考える１<食事>
  —脳の中のネットワークのためにも
- ●生活習慣について考える２<着脱など>
- ●脳についての基本的なことを学ぶ
- ●遊びについて……

第2章 園での対応。具体的な取り組み

- ●朝のおしたく　●先生の立ち位置、ピアノの位置など
- ●雨の日の工夫
- ●見通しをわかりやすくするための工夫
- ●一人ひとりを受け容れる
- ●目と手の協応動作のために　—持ち物の工夫など
- ●保護者への支援…「何を」「どう」伝えたらよいか
- ●製作などの時に気をつけること
- ●食事について……

第3章 先生方の実践と園のこれから

第4章 保育者のみなさんへおすすめ Books& Movies

キンダーブックのフレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・営業所
または本社保育営業部（03）5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育　第一一五巻　第四号　平成二十八年九月一日発行

好評発売中

保育ナビブックⅩ 第2弾！

※保育ナビ（月刊保育誌）から生まれた新シリーズ。
保育現場で気になるテーマをしっかり掘り下げます。

保育者を育てる！ 悩めるリーダーのためのコーチング

コーチングはこれからの人材育成に欠かせないテーマです。保育に特化したコーチングで、新任・若手保育者、中堅保育者の保育力向上に役立ちます。

著：播摩早苗（株式会社フレックスコミュニケーション代表。企業の新人研修、管理職研修等を運営。現在、講演活動、コーチングの普及活動等も活発に行っている）

全 96 ページ　26×18cm
定価　本体 1,800 円＋税
109-53 ISBN978-4-577-81407-9

わかりやすい解説とマンガで見せる！コーチングのヒントがいっぱい

CONTENTS（一部抜粋）

第１章　人材を育てるコーチング 12
・思いを共有するために
・人材育成はなぜ必要？
・職員の行動をどう引きだすか
・ミスをした時こそコーチングをつかおう
・成功するリーダーシップとは　……ほか

第２章　職員のタイプ別対応法
・自信があって自分の主張を曲げないタイプ
・普段は元気なのに会議でだまってしまうタイプ
・やる気が見えない指示待ちタイプ
・経験が蓄積せず進歩しないタイプ
・協調性がなく周囲ともめるタイプ　……ほか

定価　本体八三四円＋税

キンダーブックのフレーベル館
くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所
または本社保育営業部（03）5395-6608にお問い合わせください。